

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成9年度 —

西吉礼遺跡発掘調査
岡村遺跡第2次調査

1999

和歌山市教育委員会



赤色顔料を塗布した弥生土器（原寸大）

序 文

和歌山市内には、旧石器時代から江戸時代に至るおよそ 400 ケ所以上にものぼる遺跡が確認されています。それらの遺跡は、私達の祖先の残した貴重な文化遺産であります。近年、遺跡内での開発行為が盛んになり、遺跡が危機にさらされることも少なくありません。

当市におきましては、主に個人による開発に対処するため、平成 7 年度から国庫補助金・県費補助金により市内遺跡発掘調査事業を実施しています。

本書には、平成 9 年度に実施した西吉礼遺跡と岡村遺跡の発掘調査の成果を収めています。調査により、弥生時代から古墳時代にかけての土器が多く出土し、地域の歴史を考える上で良好な資料を得ることができました。この報告が、歴史解明に少しでも寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御指導いただきました和歌山県教育委員会及び発掘調査に御協力いただきました土地所有者の方々に深く感謝いたします。

平成 11 年 3 月 31 日

和歌山市教育委員会

教育長 **山 口 喜 一 郎**

例 言

- 1 本書は、平成9年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市文化体育振興事業団に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は300万円であり、国1/2、県1/8、市3/8の補助率である。
- 3 本年度の調査対象は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
西吉礼遺跡発掘調査	和歌山市吉礼917番地	平成9年11月18日～平成9年11月25日	25m ²	高橋方紀
岡村遺跡第2次調査	和歌山市本渡10-1番地	平成10年2月16日～平成10年3月10日	132m ²	北野隆亮 奥村 薫

- 4 発掘調査に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 坂口全彦
文化振興課長 志岐忠一
文化財班長 小松埴甫
学芸員 前田敬彦

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 木下正昭
事務局長 竹尻圭吾
総務課長 別院 稔
事務員 奥野勝啓（調査庶務担当）
学芸員 北野隆亮（発掘調査担当）
学芸員 奥村 薫（ ” ）
学芸員 高橋方紀（ ” ）

- 5 報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 山口喜一郎
文化振興課長 久保隆司
文化財班長 小松埴甫
学芸員 前田敬彦
学芸員 益田雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 北氏 武
総務課長 川寄健治
事務員 奥野勝啓（庶務担当）
学芸員 北野隆亮（報告書担当）
学芸員 奥村 薫（ ” ）
学芸員 高橋方紀（ ” ）
学芸員 藤薮勝則（ ” ）

- 6 本書のうち発掘調査の概要部分については北野隆亮はじめ財団法人和歌山市文化体育振興事業団学芸員が担当し、本書の構成については前田敬彦、益田雅司が協議して行った。
- 7 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 8 本書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

西吉礼遺跡発掘調査

1.調査に至る契機と経過	(高橋方紀)	1
2.位置と環境	(〃)	2
3.調査の方法と経過	(〃)	4
4.遺構	(〃)	5
5.遺物	(〃)	6
6.まとめ	(〃)	12

岡村遺跡第2次発掘調査

1.調査に至る契機と経過	(北野隆亮)	13
2.位置と環境	(奥村 薫)	14
3.調査の方法と経過	(〃)	16
4.遺構	(〃)	18
5.遺物		
(1) 縄文時代の土器	(北野)	21
(2) 弥生時代前期の土器	(藤薮勝則)	21
(3) 弥生時代中期の土器	(〃)	22
(4) 弥生時代後期の土器	(〃)	31
(5) 古墳時代前期の土器	(〃)	31
(6) 赤色顔料を塗布した壺	(北野)	33
(7) 多孔土器	(〃)	33
(8) ミニチュア土器	(〃)	33
(9) 台形土器	(〃)	34
(10) 土製品	(〃)	35
(11) 石器	(高橋方紀)	35
(12) 木器	(北野)	38
(13) 自然遺物	(〃)	38
6.まとめ		
(1) 遺構の変遷について	(北野・奥村)	38
(2) 特徴的な出土遺物について	(北野)	40
(3) 岡村遺跡北部の微高地範囲の推定	(〃)	41
報告書抄録		42

図版目次

巻頭図版 1 赤色顔料を塗布した弥生土器（原寸大）

図版 1	西吉礼遺跡 遺構	調査前の状況（南から）、全景（南から）
図版 2	西吉礼遺跡 遺構	全景（北から）、SD-1、SD-3 土層堆積状況（西から）
図版 3	西吉礼遺跡 遺構	SD-2 土層堆積状況（北東から）、調査区土層堆積状況（西から）
図版 4	西吉礼遺跡 遺物	第 5 層出土土器
図版 5	西吉礼遺跡 遺物	SD-1 出土土器
図版 6	西吉礼遺跡 遺物	第 3・5 層出土土器、石器
図版 7	岡村遺跡 遺構	調査前の状況（東から）、第 1 区 東壁面土層堆積状況（西から）
図版 8	岡村遺跡 遺構	第 1 区 全景（西から）、第 1 区 全景（東から）
図版 9	岡村遺跡 遺構	第 1 区 SD-2 土層堆積状況（北から）、第 1 区 SK-1（南から）
図版 10	岡村遺跡 遺構	第 1 区 SK-3 遺物出土状況（北から）、第 1 区 SK-3（北から）
図版 11	岡村遺跡 遺構	第 2 区 SD-1 第 1 層上面検出状況（西から）、第 2 区 SD-1 第 1 層上面 検出状況（南から）
図版 12	岡村遺跡 遺構	第 2 区 水田遺構検出状況（東から）、第 2 区 水田畦畔（南から）
図版 13	岡村遺跡 遺構	第 2 区 SD-1（西から）、第 2 区 SD-1（南から）
図版 14	岡村遺跡 遺構	第 2 区 SD-1 第 3 層下位自然木出土状況（西から）、第 2 区 SD-1 第 3 層下位遺物出土状況（東から）
図版 15	岡村遺跡 遺物	弥生土器
図版 16	岡村遺跡 遺物	弥生土器
図版 17	岡村遺跡 遺物	弥生土器
図版 18	岡村遺跡 遺物	弥生土器
図版 19	岡村遺跡 遺物	弥生土器
図版 20	岡村遺跡 遺物	弥生土器、土師器
図版 21	岡村遺跡 遺物	弥生土器、土製品
図版 22	岡村遺跡 遺物	弥生土器
図版 23	岡村遺跡 遺物	石器
図版 24	岡村遺跡 遺物	石器

西吉礼遺跡 発掘調査

1.調査に至る契機と経過

今回の調査は、和歌山市教育委員会が緊急発掘調査事業として国庫補助金を得て実施したものである。調査原因は和歌山市吉礼917番地において個人住宅建築工事が行われることになり、この工事現場が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の埋蔵文化財包蔵地である西吉礼遺跡（遺跡番号299）の隣接地にあたるため、この工事に先立つ発掘調査が必要となったものである。調査は和歌山市教育委員会から財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて実施した。調査地は遺跡の南端部に位置する（第1図、図版1）。

遺跡の周囲を概観すると、東側には西吉礼遺跡と一連のものとみられる東吉礼遺跡が存在する。両遺跡共に弥生土器の壺、甕、高杯などが採集されており、弥生時代の遺物散布地として知られているが、今日まで発掘調査は行われておらず、遺跡の内容は明らかにされていない。今回の調査は当遺跡の実態解明及びその範囲確認を目的としたものである。

調査は1997年11月18日から11月25日までの期間で実施した。



第1図 調査位置図

2.位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置しており、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町、南は海南市に隣接している地域である。

奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を流れて紀伊水道に注いでおり、その過程で運ばれた土砂によって形成された沖積平野が和歌山平野である。今回調査を行った西吉礼遺跡は、紀ノ川南岸平野部の南東にそびえる岩橋山塊、その南側に長くのびた丘陵の先端にあたる緩やかな斜面の上に位置する。南には大池付近に源を発する和田川が西流しており、和歌川と合流して和歌浦湾に注いでいる（第2図）。

周辺の遺跡を概観すると、まず旧石器時代では、調査地から南東約2kmの頭陀寺遺跡や岩橋丘陵の山中の寺内においてナイフ型石器が採集されている。また、紀ノ川北岸の山麓部に位置する鳴滝遺跡や西ノ庄地区遺跡からもナイフ型石器が出土している。

縄文時代の遺跡では、緩斜面上に位置する吉礼貝塚や鳴神貝塚・裨宜貝塚が知られている。吉礼貝塚は西吉礼遺跡の西側に隣接する遺跡で、縄文時代前期から中期の土器が採集されている。国の史跡に指定されている鳴神貝塚からは縄文時代中期から晩期の土器が多く出土している。その貝層に海水産の貝殻が多くみられることから、当時は岩橋山塊西麓あたりまで海岸線が延びていたものと推測される。

弥生時代になると遺跡の数は増し、平野部に集落が展開するようになる。弥生時代前期から営まれる代表的な集落としては、和歌山平野の中央部に位置する太田・黒田遺跡が挙げられる。この遺跡は弥生時代前期から中期を中心とした集落遺跡であり、竪穴住居や土坑墓、井戸、溝等の遺構や、銅鐸、多量の弥生土器などが検出されている。また、和歌山市と海南市の境界付近を流れる亀ノ川の下流域には、太田・黒田遺跡と共に県内最大級の集落遺跡である岡村遺跡が縄文時代後期から引き続き営まれる。弥生時代中期末から後期の遺跡としては、調査地から南へ約2.5kmの和歌山市と海南市の境界上に滝ヶ峯遺跡が存在する。これは標高100m前後の小山塊上に存在する高地性集落遺跡であり、竪穴住居の一部や岩盤を掘削した空濠等が検出されている。

古墳時代では、引き続き平野部を中心に集落が営まれる。花山丘陵の西側に展開する鳴神遺跡群で多数の方形竪穴住居跡が検出されているほか、調査地から東へ1.5kmの丘陵の麓、盆地との境に位置する平尾遺跡でも、古墳時代中期後半から後期前半の方形竪穴住居跡が合計14棟検出されている。墓域は、秋月遺跡の前方後円墳のように集落の周辺部での築造であったものが、岩橋山塊などの山麓に移り、のちには岩橋千塚古墳群などの大規模な古墳群が形成されていくものと思われる。また調査地から約800m北の丘陵部に位置している吉礼砂羅谷窯跡において、古墳時代の須恵器・埴輪を焼成した窖窯が少なくとも5基以上存在することが報告されている。

歴史時代になると、秋月の地に鎮座する日前・国懸両神社がすでに日本書紀に記されるが、この日前宮から亀川流域にかけての一带は、条里制土地区画の痕跡を良好に留めている地域である。県内でも最大規模をもつこの条里は河南条里と呼ばれており、その条里地割は遺跡の周辺にも及んでいたと推定されている。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	西吉礼遺跡	弥生	15	音浦遺跡	古墳	29	山東古墳群	古墳	43	千石山遺跡	弥生
2	岡村遺跡	縄文～奈良	16	鳴神Ⅲ遺跡		30	若林古墳群	古墳	44	城ヶ森遺跡	弥生
3	本願寺跡	中世～	17	鳴神貝塚	縄文～弥生	31	井辺遺跡	弥生	45	馬場遺跡	弥生
4	鷺ノ森遺跡	弥生～古墳	18	花山古墳群	古墳	32	神前遺跡	弥生	46	城の前Ⅰ遺跡	古墳～鎌倉
5	和歌山城跡	近世	19	栗栖Ⅰ遺跡	古墳	33	井辺前山古墳群	古墳	47	城の前Ⅱ遺跡	
6	友田町遺跡	弥生～平安	20	津秦遺跡	弥生	34	和田古墳群	古墳	49	松原Ⅱ遺跡	
7	木広町遺跡	弥生	21	津秦Ⅱ遺跡	古墳～奈良	35	和田岩坪遺跡	弥生～古墳	49	曾垣田遺跡	古墳
8	太田・黒田遺跡	弥生～近世	22	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	36	和田Ⅱ遺跡	弥生	50	薬師谷遺跡	縄文
9	太田城	安土・桃山	23	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳	37	和田遺跡	弥生	51	薬勝寺遺跡	弥生
10	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	24	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳	38	吉礼砂羅谷窯跡	古墳～奈良	52	境原遺跡	弥生～室町
11	鳴神Ⅰ遺跡	弥生～江戸	25	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	39	吉礼Ⅲ遺跡	弥生	53	頭陀寺遺跡	弥生
12	秋月遺跡	弥生～平安	26	岩橋千塚古墳群	古墳	40	吉礼貝塚	縄文	54	滝ヶ峯古墳群	古墳
13	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	27	寺内ナツ型石器出土地	旧石器	41	東吉礼遺跡	弥生	55	滝ヶ峯遺跡	弥生
14	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	28	寺内古墳群	古墳	42	萬蒲谷遺跡	弥生	56	薬勝寺南山古墳群	古墳

第2図 西吉礼遺跡周辺の遺跡分布図

3.調査の方法と経過

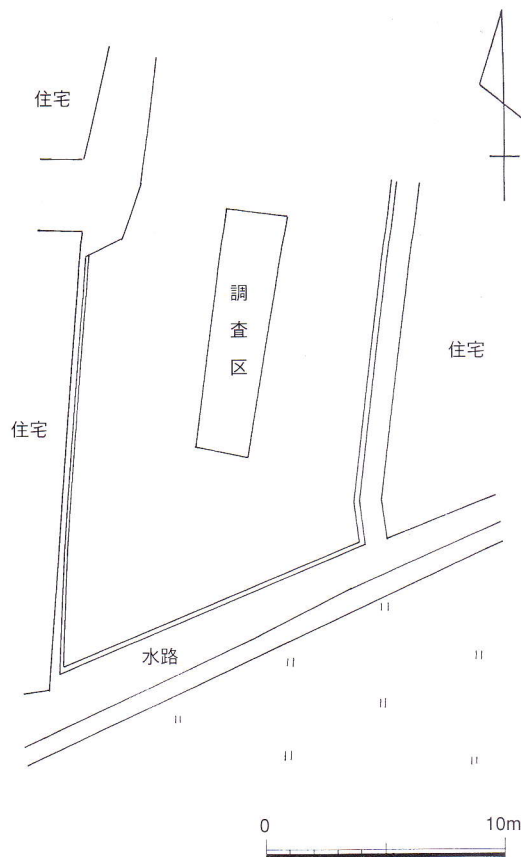
(1) 調査の方法

調査は個人住宅建築工事予定範囲内において、東西2.5m、南北10mの約25m²の調査区を設定して実施した(第3図)。

調査の方法としては表土以下第3層まで重機掘削を行ったのち、遺構の調査を人力掘削によって行った。

遺構の掘削については、基本的に土層堆積観察用のベルトを直行するライン上に設け、記録保存としてベルト及びベルトに相当する壁面の写真撮影、実測図等の作成を行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用いた。

図面による記録に関しては、調査区に沿った任意の基準ラインを設定して平面実測を行い、磁北により方位を示した。また、平面実測図及び土層堆積状況図は1/20の縮尺ですべて手実測で作成し、遺跡の水準は国家水準点を基準とした。

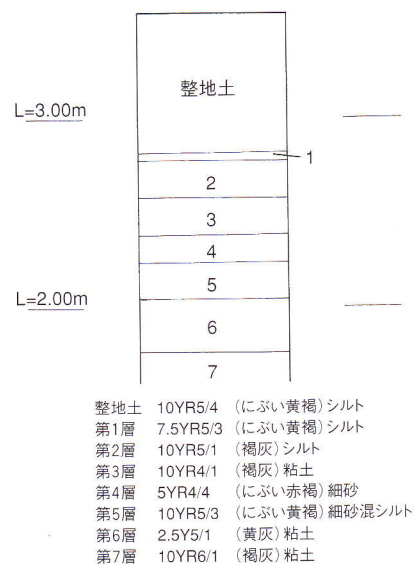


第3図 調査地周辺図

(2) 調査の概要

調査地の基本的な土層堆積状況は、現地表である現代の整地土が約70～80cmの厚みを持ち、第1層(7.5YR5/3(にぶい黄褐)シルト)が約5cm、第2層(10YR5/1(褐灰)シルト)が約20cmの厚さで堆積する。その下の堆積としては第3層(10YR4/1(褐灰)粘土)が約20cm、第4層(5YR4/4(にぶい赤褐)細砂)が0～15cm、第5層(10YR5/3(にぶい黄褐)細砂混シルト)が約20cmの厚さで堆積する。また調査区東側において一部深く掘削した結果、第6層(2.5Y5/1(黄灰)粘土)が約30cm、第7層(10YR6/1(褐灰)粘土)が5cm以上の厚さでみられた。(第4図)。

第1層は調査区北側にのみ堆積するもので、第2層は中世の遺物の包含層である。耕作土である第3層は奈良・平安時代の遺物を包含しており、



第4図 調査地土層柱状模式図

この第3層掘削後の第4・5層上面において古墳時代後期から奈良時代までの遺構を検出した。第4層は北側にのみ堆積するもので、第5・6層は弥生時代の遺物を包含している。特に第5層において大量の弥生土器が出土した。なお、第7層は無遺物層であることを確認することができた。

4. 遺 構

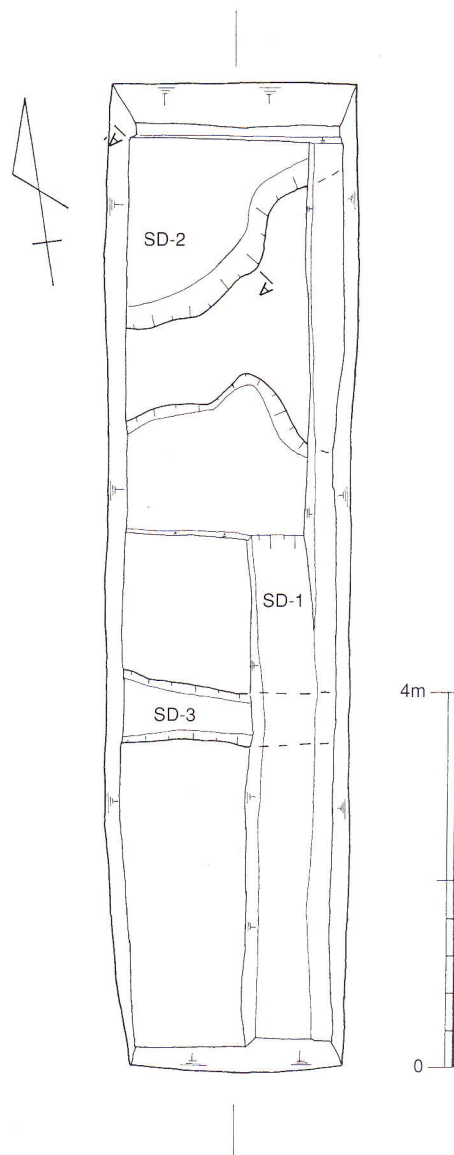
遺構は第4・5層上面において検出した溝3条で、SD-1とSD-3は古墳時代後期、SD-2は奈良時代のものである（第5図、図版1・2）。遺構面の標高は2.2～2.3mを測る。以下に説明する。

[SD-1]

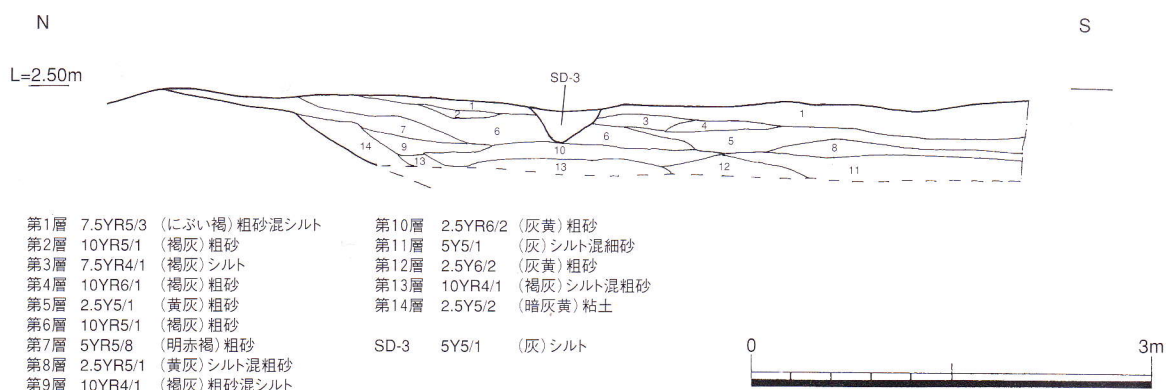
調査区南半分において遺構の北側肩部を検出した。検出幅約7m、検出長2.5mを測る大溝である。遺構の東半分を約50cmほど掘り下げたが、完掘には至らなかった。土層堆積状況について現状で14層に分層することができた（第6図、図版2）。出土遺物の中には弥生土器もみられるが、これは第5層に包含されている遺物が流れ込んだものと思われる。上層からの出土遺物には陶器編年TK209～217型式の範疇に含まれる須恵器が出土していることから、SD-1は7世紀前半までには埋没したものと考えられる。

[SD-3]

調査区南側のSD-1上面で検出したものである（第6図、図版2）。SD-1の第1層の上面から切り



第5図 遺構平面図

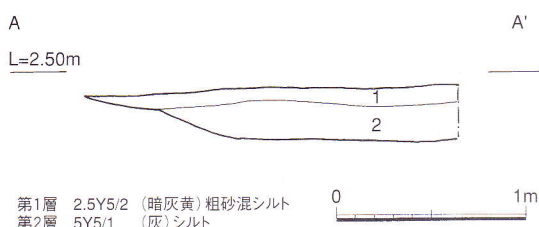


第6図 SD-1・3土層断面図（調査区東壁）

込む小溝で幅60cm、深さ20cm、検出長約2.5mを測る。単層の堆積であり、流路方向は底面の標高から西から東と思われる。出土遺物には陶邑編年TK209～217型式の杯蓋がみられることから、SD-1埋没直後のものとみられる。

[SD-2]

調査区北端で検出したものである。検出幅約1.8m、深さ約30cm、検出長約2.4mの規模を測る溝である。土層堆積状況について2層に分層することができた(第7図、図版3)。上層からは8世紀前半の所産とみられる須恵器の破片が出土している。



第7図 SD-2土層断面図

5.遺物

遺物は、弥生時代の土器・石器、古墳時代の須恵器・土師器、奈良時代の須恵器や中世土師器、備前焼が出土しており、その他自然遺物として獣骨、馬の歯、炭、流木、桃の種子などがある。その量は遺物収納箱(コンテナ)に12箱を数える。

以下、主要な遺物について時期毎に分類して記述し、その中でSD-1を遺構一括出土資料としてまとめた。また、石器は最後に記述する。

(1) 弥生時代中期の遺物(第8図1～10、図版4)

1は口径16.8cmを測る直口壺の口縁部である。断面三角形の突帯を貼り付け、その上方に波状文を施している。内面はナデにより調整されており、口縁端部は内側に肥厚させ段を持たせている。

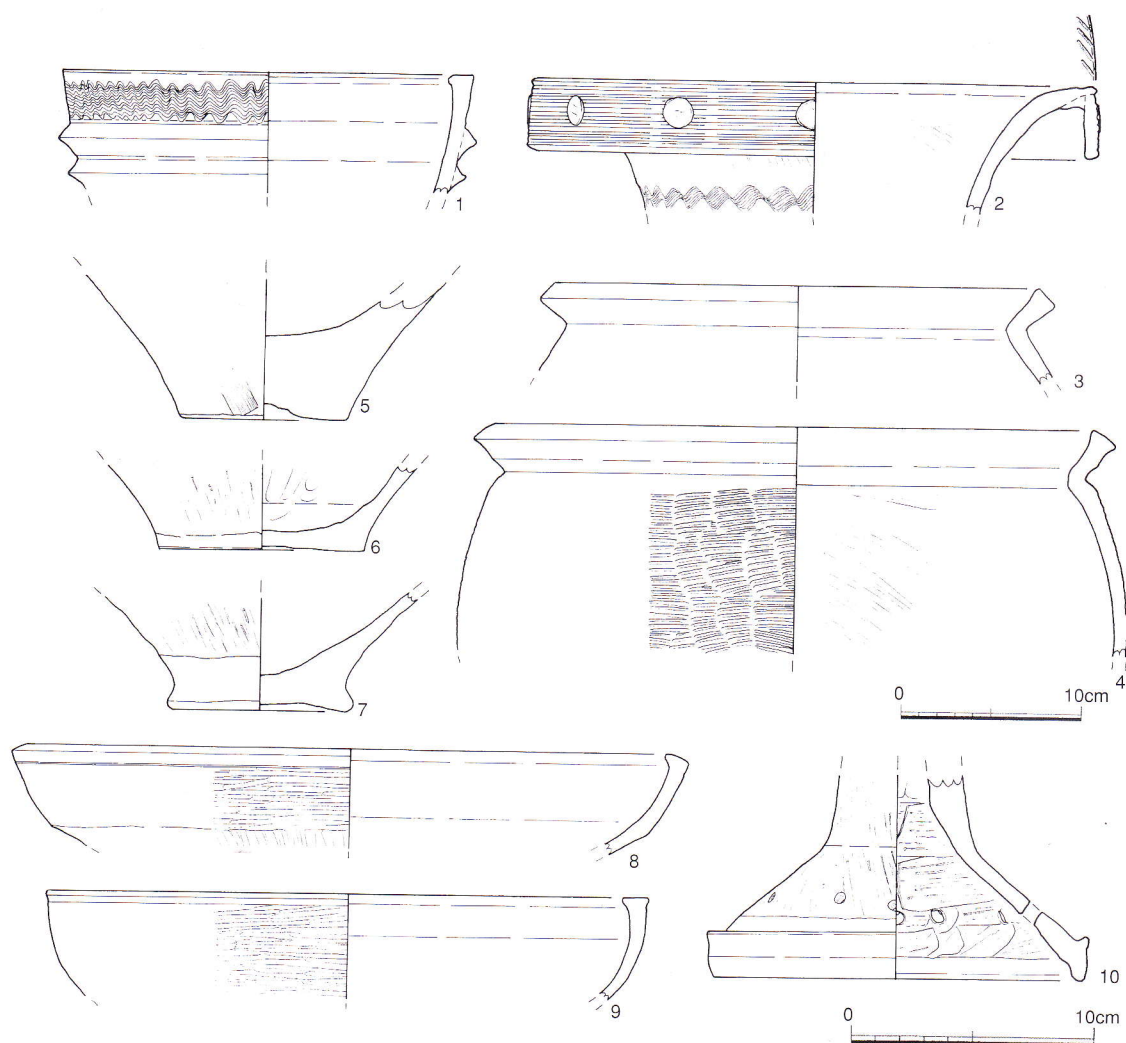
2は広口壺の口縁部である。口径31.0cmを測る。垂下部には幅狭の凹線を多条に施した後に、直径約1.6cmの円形浮文を張り付けている。また口縁上端部には櫛描列点文、頸部には波状文を施して加飾している。

3・4は甕の口縁部で、共に口縁部を肥厚させるタイプである。4は外面にタタキ調整を施すもので、口縁部はナデによって仕上げている。口径は3が26.6cm、4が32.8cmを測る。

5～7は底部であり、底径はそれぞれ6.8cm、8.4cm、7.0cmを測る。6・7は縦方向のヘラケズリ調整が施してあることから、紀伊型甕の底部とみられる。

8・9は鉢の口縁部で、口径はそれぞれ25.8cm・24.5cmを測る。共に口縁を内側に肥厚させ端部に面を持たせ、口縁部下に凹線文を1条施している。8は体部には縦方向、口縁部には横方向のヘラミガキ調整を施し、その変換点で稜をなしている。9の外面は横方向のヘラミガキ調整であり、内面は8・9ともナデによる調整である。

10は高杯である。脚部には径6mm程度の円孔が3個1組で計12箇所に穿たれている。外面には縦方向の、内面には横方向のヘラケズリ調整が施され、端部はナデにより上下に肥厚させて調整されている。底径は15.0cmを測り、外面は明褐色に発色する。



第8図 遺物実測図1

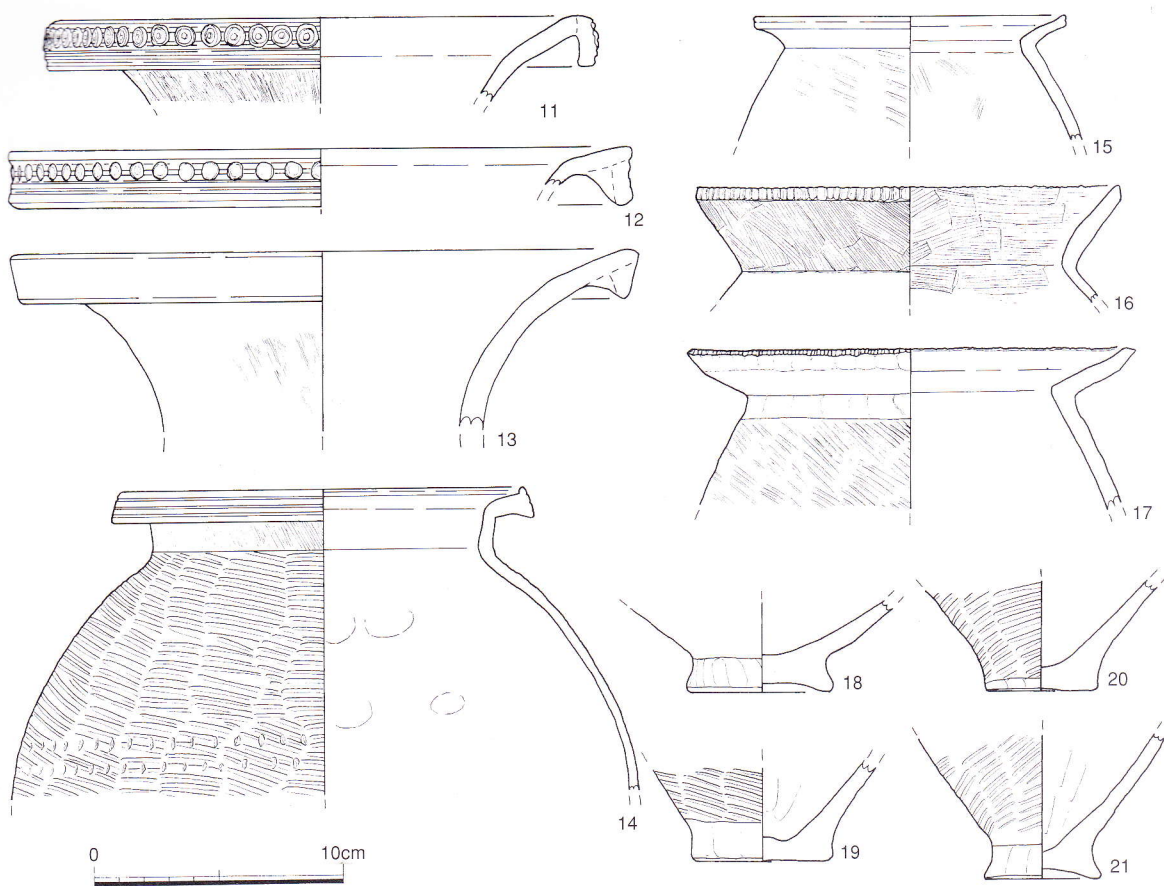
以上の遺物は紀伊第Ⅲ～Ⅳ様式に併行するもので、出土位置は5・8・9がSD-1、1・3がSD-2、2・4・6・7・10が第5層である。

(2) 弥生時代後期の遺物 (第9図11～21、図版4)

11～13は広口壺の口縁部である。11は口縁垂下部に5条の凹線文を施した後、円形浮文を張り付けるもので、浮文は竹管の押圧により加飾されている。また、頸部上位にはヘラミガキを密に施す。口径11.6cmを測る。12は口径24.8cmを測るもので、口縁の垂下部は短く断面三角形状を呈する。口縁外端面には凹線を三条巡らした後、竹管文を密に施す。13は口径25.0cmを測り、頸部にハケ調整を施すものである。

14は口径15.8cmを測る短頸壺である。体部にはタタキが明瞭に残り、頸部にはハケ調整、上方に肥厚させた口縁端部には3条の凹線文を施す。体部中位には上下2段の刺突痕がみられ、これが等間隔で平行に施されていることから、周囲を巡っているものと思われる。

15～17は甕の口縁部である。15は体部外面をタタキの後ナデ、内面をハケにより調整している。16は外面は斜め方向、内面は横方向のハケ調整がみられ、口縁端部には刻目を施す。17は体部をタタキ、



第9図 遺物実測図2

頸部を強いナデによって調整しており、口縁部は指頭による調整で屈曲させた後に端部に刻目を施す。口径はそれぞれ12.6cm、17.0cm、17.0cmを測る。

18～21は底部であり、底径はそれぞれ5.6cm、5.7cm、4.5cm、4.6cmを測る。19～21はタタキが施されることから甕の底部とみられる。

以上の遺物は紀伊第Ⅴ様式に併行するもので、出土位置は15・18がSD-1、12・16・19・20がSD-2、11・13・17・21が第5層である。

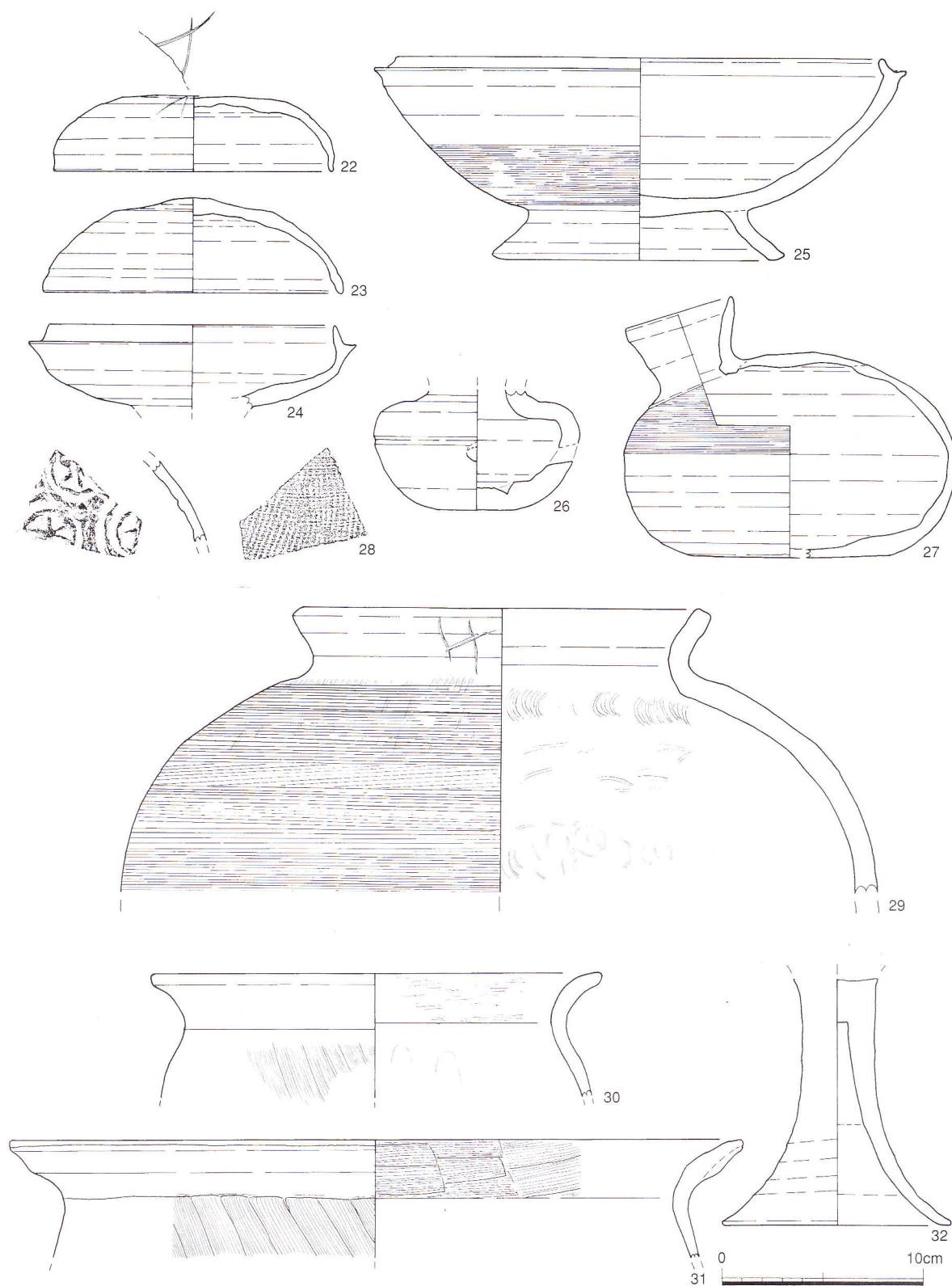
(3) 古墳時代の遺物

[SD-1 出土遺物] (第10図22～32、図版5) 22～29は須恵器である。22・23は蓋で、それぞれ口径13.6cm、器高3.7cm、口径14.6cm、器高4.6cmを測る。共に天井部約1/3の範囲に回転ヘラケズリ調整を施し、22は天井部にヘラ記号をもつ。24は高杯の杯部で、口径14.0cmを測るものである。これらは陶邑編年のTK209型式に比定でき、6世紀末から7世紀初頭のものと考えられる。

25は台付鉢である。口径23.6cm、底径13.0cm、器高10.0cmを測る。口縁部及び内面は回転ナデ調整であり、底部から約1/2をカキメ調整を施した後、脚部をナデにより貼り付けている。焼成はやや軟質で淡灰色を呈する。

26は甕である。胴部径10.2cmを測るもので、底部の外面には不定方向のナデが、内面には刺突による調整がみられる。27は平瓶である。口径5.4cm、底径9.8cm、胴部径16.2cm、器高12.9cmを測る。底

部には回転ヘラケズリ調整、体部の上半分にはカキメ調整が施されており、口縁部はカキメ調整の後に穿孔を施し、ナデによって貼り付けられている。これらは共に陶邑編年TK209～217型式の範疇に含まれるものである。



第10図 遺物実測図3

28・29は甕である。28は体部の破片で、外面はタタキの後カキメ調整が、内面には「車輪文」の当て具痕が観察できるものである。器壁の厚さは約6mmと薄く、胎土は精緻で灰白色に発色している。29は口径19.0cmを測る。外面はタタキの後カキメ調整、内面は当て具痕をナデ消しており、口縁部にはヘラ記号がみられる。

30～32は土師器である。30・31は甕であり、口径はそれぞれ22.2cm、36.0cmを測り、共に体部外面及び口縁部内面にハケ調整を施す。また31は口縁部外面に粘土を貼り付け、厚みを持たせている。

32は高杯脚部である。内外面は回転ナデによる調整で、須恵器技法を用いて製作されている。底径は11.1cmを測る。

[その他の出土遺物] (第11図33～39、図版6) 33～38は須恵器である。33～35は蓋であり、33は口径13.8cm、器高3.8cm、34は口径11.6cm、器高3.9cm、35は口径9.6cm、器高3.2cmを測る。33は天井部の約1/2、34・35は約1/3の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。36は口径13.7cmを測る杯身である。以上の遺物は陶邑編年のTK209～217型式に比定できる。

37は甕の口縁部である。口径は18.7cmを測り、口縁端部はやや垂下させて面を持つ。38は壺の底部である。底径9.9cmを測る。底部は回転ヘラケズリ調整を施した後に脚を貼り付けている。

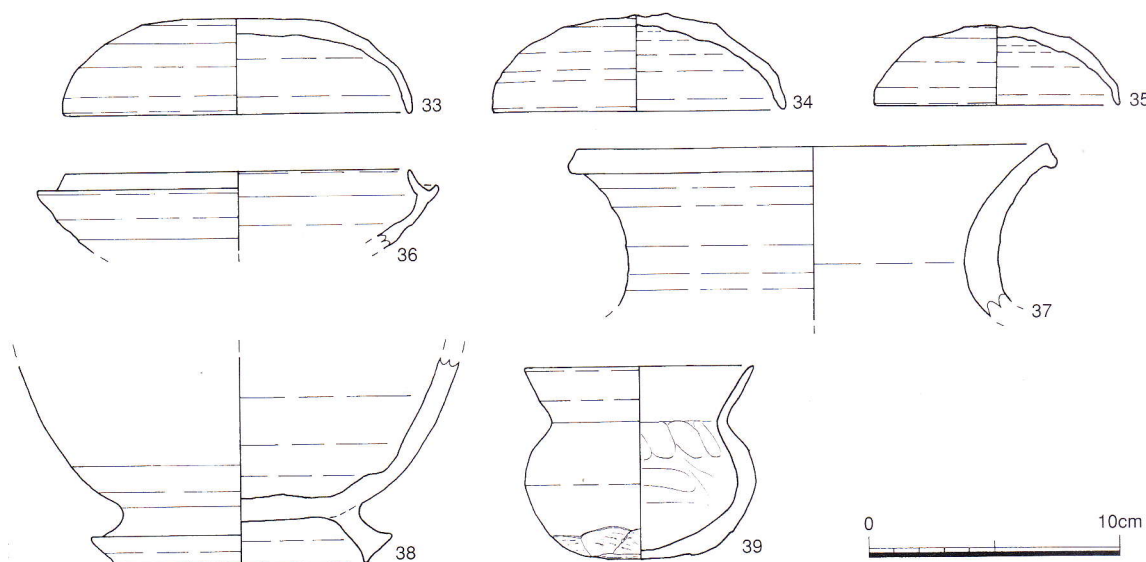
39は土師器の小型丸底壺である。口径9.0cm、胴部径9.2cm、器高7.7cmを測る。底部は手持ちによるヘラケズリ調整が施される。

以上の遺物の出土位置は、38がSD-2、33がSD-3、34～37・39が第5層である。

(4) 石器 (第12・13図40～46、図版6)

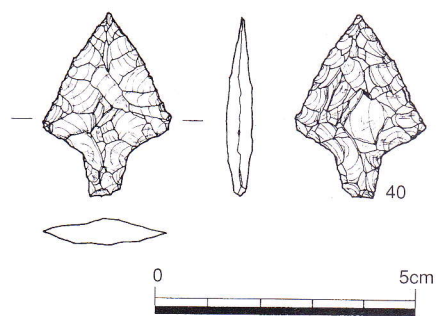
40はサヌカイト製の有茎式石鏃である。長さ3.5cm、幅2.5cm、厚さ5mmを測り、重量は2.75gである。

41～44は叩石である。41は花崗岩質の石材を使用したものである。節理により全体の約1/2を失っている。中央やや右寄りに敲打による楕円形の凹みが深さ6～7mmの規模でみられる他、凹みの周



第11図 遺物実測図4

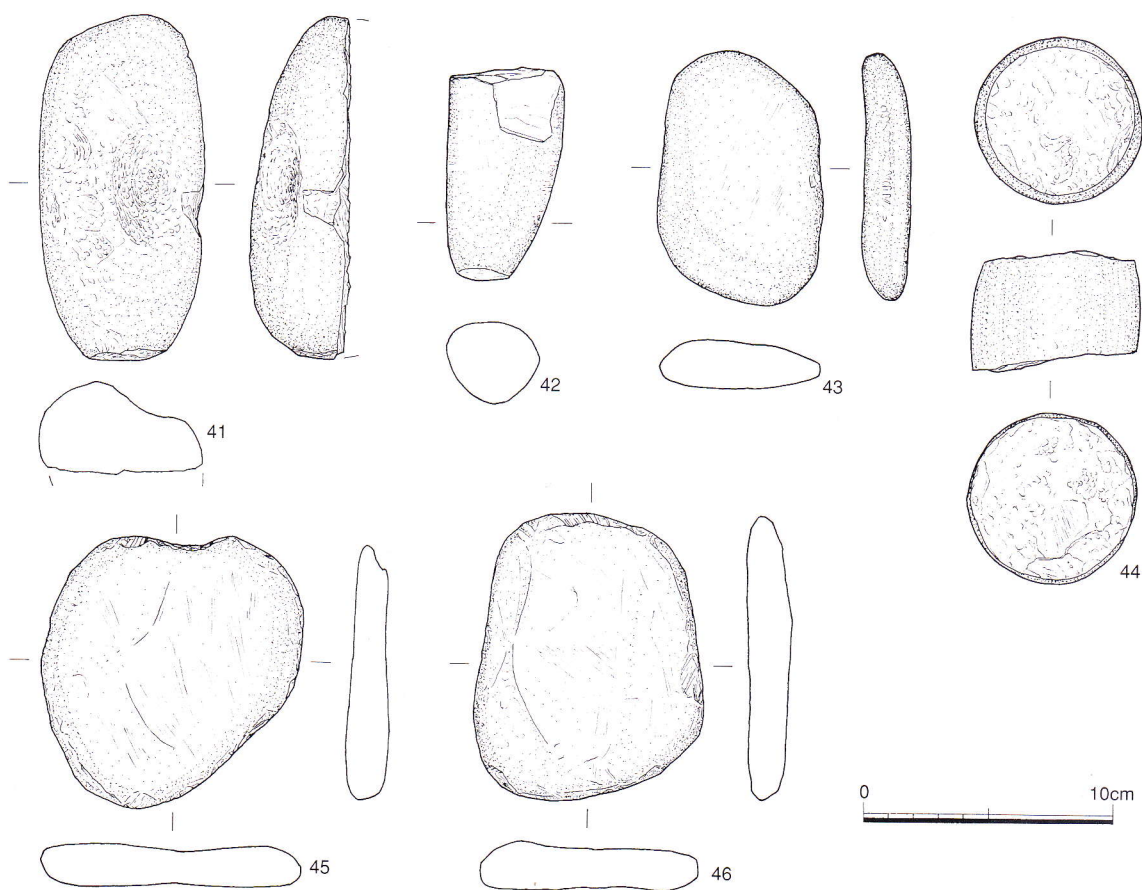
囲や上下左右の端面も敲打に使用している。長さ13.8
 cm、幅6.6cmで重量は570gを量る。42・43は砂岩製で、
 色調は共に青灰色を呈する。42は先端部及び両側縁を、
 43は両側縁を敲打に使用している。また共に磨痕が認め
 られることから、磨石との複合石器であるといえる。
 法量は42が長さ4.6cm、幅4.6cm、厚さ3.2cm、43が長さ
 10.2cm、幅6.6cm、厚さ2.0cmを測り、重量はそれぞれ
 160g、200gを量る。44は花崗岩製で、灰白色を呈する
 のものである。形態から石棒を転用したものと思われ、
 その上下面を敲打に使用している。直径5.6cm、高さ4.9
 cmで、重量は350gである。



第12図 遺物実測図5

45・46は結晶片岩製の磨石である。共に両面及びその縁辺部に磨痕が顕著に認められる。法量は45
 が長さ10.9cm、幅10.3cm、厚さ1.7cm、46が長さ11.5cm、幅9.1cm、厚さ2.0cmを測り、重量はそれぞれ
 330g・360gである。

以上の遺物の出土位置は、43がSD-1、42がSD-3、40・41・44～46が第5層である。



第13図 遺物実測図6

6.まとめ

西吉礼遺跡は、壺・甕等の弥生土器が採集されていることから『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に弥生時代の散布地として記載されているが、これまで発掘調査が行われたことがなくその実態は不明であった。

今回の発掘調査の結果、古墳・奈良時代の遺構やそれに伴う多くの遺物が出土し、下層の包含層からも多量の弥生土器が確認できた。中でもSD-1は幅7m以上を測り、東西の方向性を持つ大規模な溝であり、埋土からは須恵器・土師器等の土器類の他に、石器・馬の歯・流木などが出土している。特に下層の粘土層からは流木が大量に出土しており、遺構の規模や堆積状況も含めて考えると旧河道の可能性が高い。また第6・7層は共に軟質の粘土層であり、調査区周辺はSD-1以前にも河川の氾濫原であったと思われる。

次に出土した遺物を観察すると、第5層に包含されている弥生土器は紀伊第Ⅲ～Ⅴ様式併行期のものであり、これらの土器を使用した弥生時代中～後期の集落が周辺に展開していたと思われる。これに引き続く時期の遺物は今回の調査では確認されていないが、古墳時代後期にはSD-1から7世紀初頭～前半を中心とする遺物が多く出土している。また周囲の地形から、SD-1の流路方向は東から西であったと想定できることから、この時期の集落の中心はその上流、つまり東側であった可能性が高い。

これまで西吉礼遺跡は弥生時代の散布地とされていたが、今回の調査によって弥生時代中～後期の遺物包含層を確認した以外に、古墳・奈良時代の遺構を検出できたことは大きな成果である。調査地は遺跡地図上では南側縁辺部にあたるが、当該地においても多量の土器が出土することは、遺跡の範囲はさらに南側に広がるものと思われる。また特殊な遺物として、車輪文の当て具痕を持つ須恵器甕や台付鉢が出土しているが、前者は大阪府陶邑古窯址群、後者は鳴神Ⅴ遺跡において少数ながら類例が認められるものである。西吉礼遺跡北側の丘陵部に位置する吉礼砂羅谷窯跡群との関係なども含めて、今後注目されるところであろう。

【参考文献】

『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』 和歌山県教育委員会 1996年

『鳴神Ⅴ遺跡発掘調査概要報告書』 (財)和歌山市文化体育振興事業団 1994年

『古代窯業史の研究』 中村浩 柏書房 1985年

岡村遺跡 第2次調査

1.調査に至る契機と経過

岡村遺跡は、和歌山市と海南市の境界付近を流れる亀ノ川下流に位置する。遺跡は、亀ノ川をはさんで東西約700m、南北約600mの範囲で和歌山市本渡と海南市岡田に広がり、縄文時代から江戸時代に至る複合遺跡として知られている（第1図）。本遺跡の調査は、昭和52年度以降、(財)和歌山県文化財センターや海南市教育委員会などによって実施されている。これらの発掘調査において、縄文時代の溝、弥生時代の竪穴住居、溝、土坑、古墳時代の竪穴住居・溝、中世の井戸、近世の石垣などの遺構や弥生時代の土器・石器の他、木器や銅鐸型土製品などの遺物が出土している。

本遺跡周辺の遺跡をみると、弥生時代では薬勝寺遺跡、和歌山市から海南市にまたがる滝ヶ峰遺跡、海南市側では亀川遺跡、且来Ⅱ・Ⅴ遺跡などがあげられる。古墳時代には和歌山市から海南市にまたがる山崎山古墳群、海南市側では且来Ⅳ遺跡、室山古墳群などがあげられる。

今回、この周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡番号395）である岡村遺跡の範囲内にあたる本渡10-1番地において、盛土工事が実施されることになった。このため、和歌山市教育委員会が緊急発掘調査事業として国庫補助金を得たものである。現地における発掘調査は、同市教育委員会から財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受け実施したものである。本調査地は標高5.5～9.0mを測る沖積平野上にあり、遺跡の北部に相当する（第1図）。



第1図 調査位置図

2.位置と環境

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、南は海南市に隣接している。今回調査を行った地点は、和歌山市南端のほぼ中央部に位置する。調査地の南側に位置する亀の川は、海南市の長峰山脈北斜面の海老谷に源を発し、下流域において和歌山市と海南市の境を流れる延長約14kmの小河川である。この川が現在のような流れになったのは、宝永7（1710）年の河川改修によるものであり、新川とも称されたと「続風土記」には記されている。旧流路は且来地区より北西に流れ、和歌山市本渡の丘陵南裾から蛇行しながら山崎山の北東裾を西流し、紀三井寺から曲流して和歌川に合流していたとされる。

当河川中流の河谷では小規模ながら河岸段丘が形成され、下流においては、東西約3km、南北約1kmの沖積平野（亀川平野）が広がっている。今回調査を行った岡村遺跡は、この沖積平野を流れる旧亀の川中流域南岸に形成された標高約7.5mの微高上に立地し、調査地は、遺跡の北東部に位置する（第2図）。

次に周辺の遺跡を概観すると、縄文時代においては、海南市野上谷の日方川流域から貴志川の河岸段丘にかけて、縄文土器及び石器の分布が多くみられるが、海南市小野田東では有舌尖頭器が採集され、すでに草創期に人々が生活し始めていたことが知られる。続く早期から前期にかけては、鯉田池遺跡から石鏃や石錘などの石器が採集され、また前期から中期の遺物が採集された亀池遺跡などが知られている。また貴志川中流域北岸の河岸段丘上にある溝の口遺跡は、多数の柱穴や炉跡、配石遺構が検出された遺跡であり、後期の土器、土偶、耳栓、石器などが出土している。このほか、亀川平野の南側に位置する城ヶ峯丘陵の南山麓を流れる日方川流域の鳥居遺跡からは後期の土器・土偶・石器などが採集されている。

弥生時代には、亀の川中流域に亀川遺跡、且来Ⅱ・Ⅴ遺跡が展開する。亀川遺跡からは、中期から後期にかけての竪穴住居や中期の方形周溝墓などが検出され、周溝墓からは鉄製の釣針や鉋などが出土している。日方川中流域に位置する大野中遺跡からは、弥生時代の竪穴住居1棟と浅い溝などが検出された。また、後期になると、亀の川北岸の標高80mの丘陵に、高地性集落として知られる滝ヶ峯遺跡などが位置し、竪穴住居の一部などが検出されている。

古墳時代では、平野に数ヶ所の集落遺跡がみられ、和歌山市域である亀の川北岸においては弥生時代から続く滝ヶ峯遺跡、薬勝寺遺跡などが知られる。また、南岸においては且来Ⅳ・Ⅵ遺跡が展開し、竪穴住居などが検出されている。

また、この地域の墓域は、亀の川南岸の丘陵に山崎山古墳群などが造られている。この山崎山古墳群は14基の群集墳であり、中でも5号墳は全長45mに及び海南市内唯一の前方後円墳である。この古墳の埋葬施設は、礫棚に納めた割竹形木棺であり、鉄剣、銅剣などが出土している。このため、流域を支配した首長を葬ったと考えられている。しかし、6世紀後半に古墳築造の中心は、山崎山から西方の室山古墳群へと移行していく。室山古墳群には7基の古墳が築かれており、これらの内1・2号墳は、渡来系氏族である紀氏の墓域とされる紀ノ川南岸の岩橋千塚古墳群と同様、玄室前道をもつ「岩橋型」の横穴式石室であり、石棚、石梁を備えるものである。当地の後期古墳は、岩瀬千塚古墳群と比較するならば構造などに類似した要素がみられることから、古墳時代前期には亀の川流域の独自性をもつものであったが、後期には岩瀬千塚古墳群を築いた勢力圏の影響を受けるようになったものと考えられている。

歴史時代では、和歌山市においては白鳳期創建の薬勝寺跡が知られる。この遺跡境内の薬師寺付近

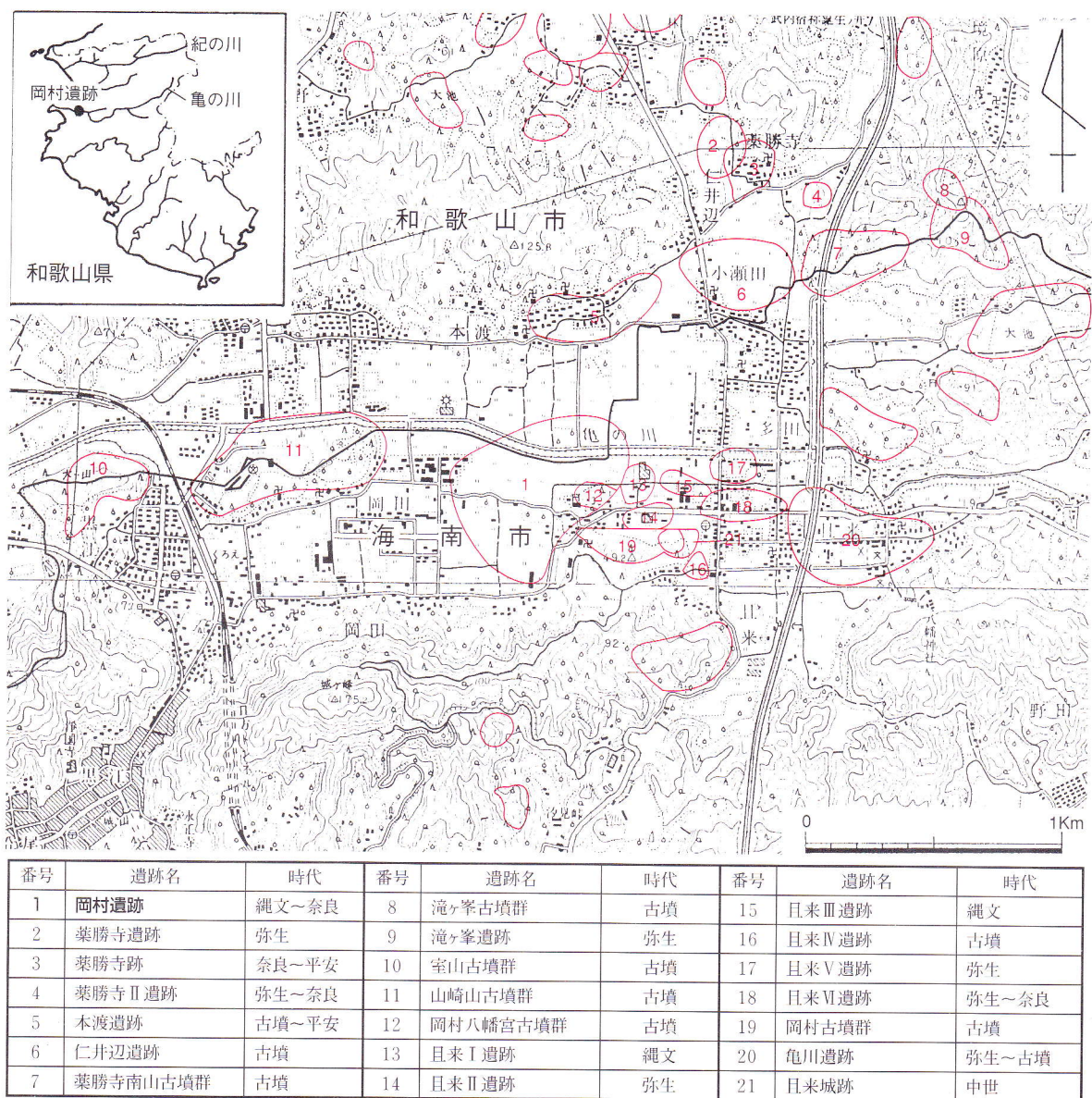
からは、奈良時代前期の瓦が採集されている。また、海南市側においては古墳時代からの集落である且来Ⅵ遺跡が挙げられ、7世紀から8世紀初頭の掘立柱建物群が検出されている。このほか、当遺跡周辺は旧亀の川南岸一帯に広がる条里制土地区割りの痕跡を良好に留め、亀川条里と称されている。

【参考文献】

和歌山市市史編纂委員会 『和歌山市史』第1巻 和歌山市 1991年

和歌山県県史編纂委員会 『和歌山県史』考古資料編 和歌山県 1983年

中野榮治 『紀伊国の条里制』 古今書院 1989年



第2図 調査地周辺遺跡分布図

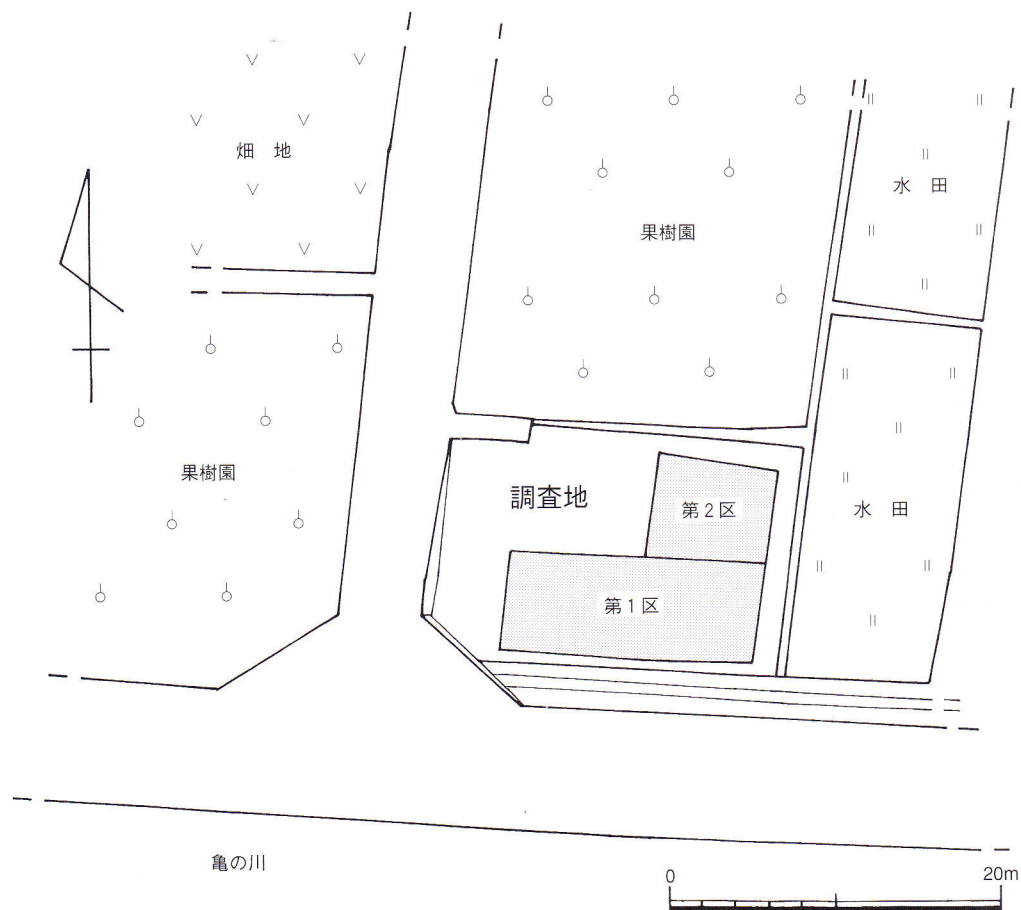
3.調査の方法と経過

(1)調査の方法

今回の調査は、岡村遺跡の範囲内で盛土工事が行われることとなったため、この工事予定範囲内において、1998年2月16日から3月19日の期間で面積約132m²の調査を実施した。まず工事予定範囲南側において南北約6m、東西約15m、面積約90m²の調査区を設定し、第1区と呼称して2月16日から3月10日の期間で調査を行った。この調査において、調査区東壁面の土層観察を行い、畦畔状の堆積を確認したことから、調査区北側に水田遺構が展開している可能性が考えられた。このため、第1区に隣接した北側に南北約6m、東西約7m、面積約42m²の調査区を設定し、第2区と呼称して3月13日から19日までの約2週間の期間で実施した(第3図)。

調査は、地表面(耕作土)から第4層(中世遺物包含層)まで機械掘削を行い、第5層以下を人力によって掘削した

土層の色調及び土質観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。次に図面による記録は、調査区外北東隅に仮原点(NS0.EW0)を設け、原点から南をS、西をWで示し、このラインを基準に実測図の作成を行った。遺構平面実測図及び調査区壁面の土層堆積状況実測図については1/20の縮尺で全て手実測で実施した。また遺跡の水準は、国家水準点を基準とした。



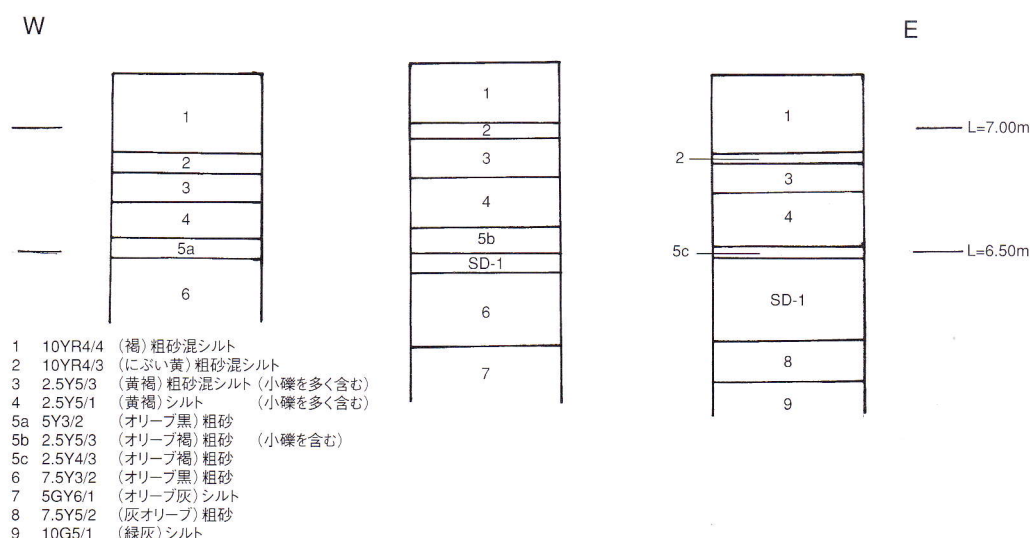
第3図 調査地周辺図

(2)調査の概要

調査地は畑地として利用されており、地表面の標高は約7.2～7.4mを測る。以下、調査地の基本的な土層堆積状況について記述する（第4図）。

現地表面である耕作土（第1層・10YR4/4(褐)粗砂混シルト）が、5～30cm、床土（第2層・10YR4/3(にぶい黄褐)粗砂混シルト）が約10cmの厚さで堆積する。その下の堆積は旧耕土とみられる堆積の第3層（2.5Y5/3(黄褐)粗砂混シルト）が10～20cmの厚さで堆積しており、小礫を多く含んでいる。第4層（2.5Y5/1(黄灰)シルト）は中世の遺物包含層で、約20cmの厚さで堆積しており小礫を多く含むものである。第5a層（5Y3/2(オリーブ黒)粗砂）は10cm、第5b層は（2.5Y5/3(オリーブ褐)粗砂(小礫を含む)）は約10cm、第5c層（2.5Y4/3(オリーブ褐)粗砂）は約10cmの厚みで堆積しているが、これらは堆積状況の観察の結果、河道の氾濫によるものであり、古墳時代後期のものと考えられる。第6層（7.5Y3/2(オリーブ黒)粗砂）は50cm以上で堆積しており、この層上面が遺構面である。第7層（5GY6/1(オリーブ灰)シルト）は20cm以上、第8層（7.5Y5/2(灰オリーブ)粗砂）は10cm以上、第9層（10G5/1(緑灰)シルト）は30cm以上の堆積を確認した。第6層から第9層までは、東から西に向かって緩やかに傾斜して堆積しているほか、遺物を出土しないことから自然堆積層と考えられる。

遺構については、調査区の東側において大溝（SD-1）を検出した。この大溝は、弥生時代中期の河道とみられ、これより西側において同時期の遺構である溝1条（SD-2）、土坑を5基検出した。また大溝（SD-1）がほぼ埋没した上面において弥生時代後期の水田遺構を検出した。しかし、この水田遺構は古墳時代前期に河道の氾濫を受けて大部分を削平されている。



第4図 調査地土層柱状模式図

4.遺 構

遺構は第4層下面において、弥生時代中期から後期にかけてのものを検出することができた。調査区の東側で検出した大溝(SD-1)は、中期後葉の河道とみられ、中期末から後期前葉にかけて河道がほぼ埋没した後に水田化されたものと考えられる。調査区西側では、弥生時代中期の溝1条(SD-2)、土坑5基(SK-1～5)を検出した。これらの他に、西側において河川氾濫に伴い形成されたとみられる弥生時代中期の落ち込み状の堆積(SX-1・2・3)を確認することができた。このほか調査区北東側において、古墳時代前期の河川氾濫に伴い形成されたとみられる落ち込み状の堆積(第5c層)を検出した。これは、河川氾濫に伴う一時期の流路であるとみられ、調査区内において水田遺構の大部分を削平するものである。検出規模は、幅約5m、長さ約6.5m以上、最深部で約20cmを測る。埋土内から庄内式～布留式併行期とみられる遺物が出土した。遺構面の標高は約6.5mを測る。以下、時代順に主要な遺構を説明する。

(1)弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構のうち中期中葉とみられるものは、SK-3～5、SX-3、中期後葉のものは、SD-1・2、SK-1・2、SX-1・2である。以下、時期別に記述する。

[SK-3]

調査区の南西隅において検出した不整円形の土坑である。東西長2.2m以上、南北長2.2m以上、最深部は約20cmの規模を測る。この遺構からは、中期中葉とみられる甕が、口縁部を南側、底部を北側の方向に向けた状況で出土した。

[SK-4]

調査区の西壁際の中央部において検出した土坑である。東西長30cm以上、南北長90cm以上、最深部は約14cmの規模を測る。

[SK-5]

調査区の西南部の壁際にそって検出した土坑である。東西長約50cm、南北長40cm以上、最深部は約14cmの規模を測る。この埋土内から、中期中葉とみられる壺が、頸部を北東方向、底部を南西方向に向けた状況で出土した。

[SX-3]

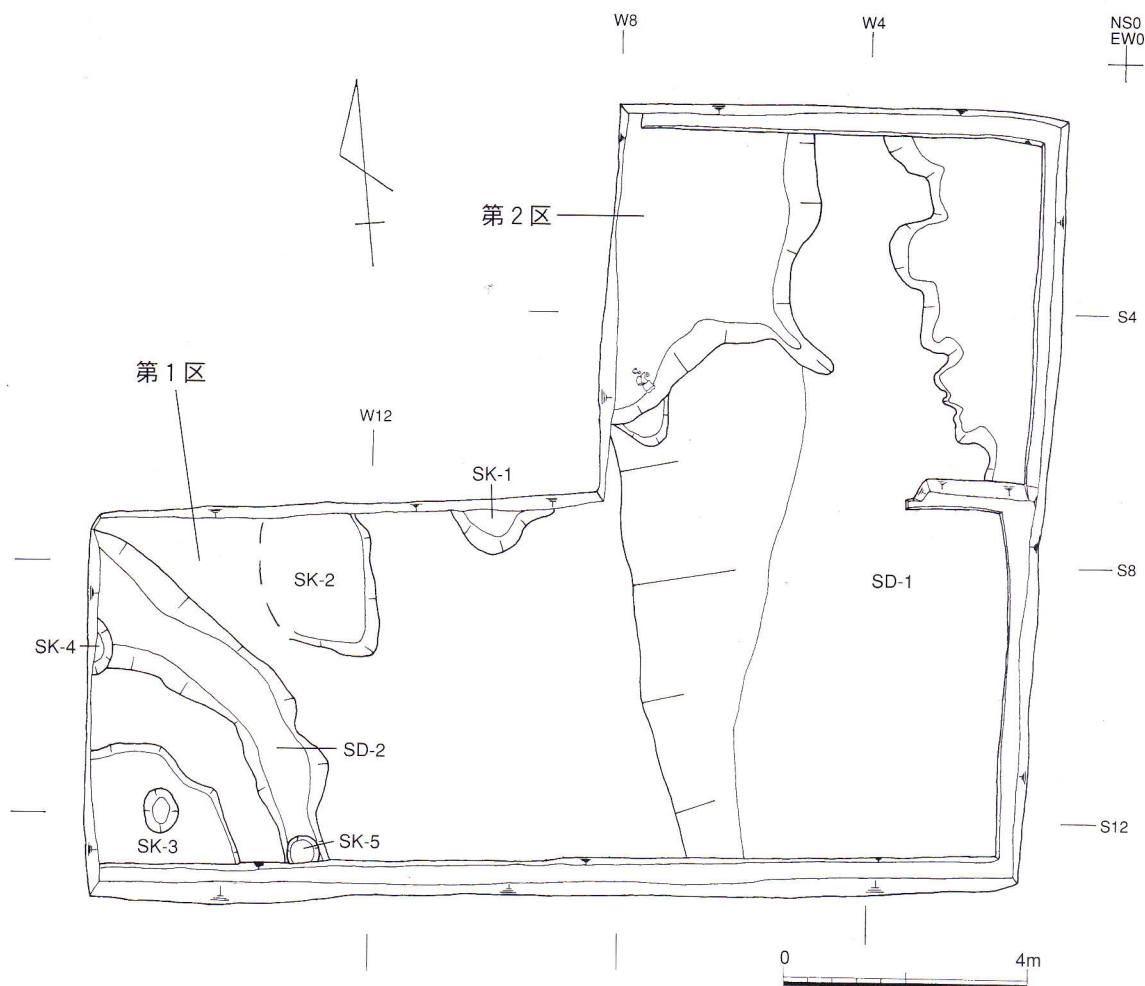
調査区西側において検出した遺構であるが、河川氾濫に伴う堆積とみられる。東西2m以上、南北6m以上、深さ10～30cmの規模を測る。埋土からは中期中葉の壺などが出土した。

[SD-1]

調査区東側において検出した南東方向に延びる大溝である。検出規模は、幅7m以上、最深部約40cm、長さ約14mを測り、東側に広がりをもつ溝である。土層の堆積状況は3層に分層することができた。最下層から中期後葉とみられる遺物が出土した。

[SD-2]

調査区西側の北西から南東にかけて検出した小流路である。平面プランは不定形な弧を呈し、検出長約6m、幅0.8～2m、最深部約30cmの規模を測る。この流路方向は、底面の標高差から南方向から



第5図 遺構全体平面図

北方向とみられる。単層の堆積であり、埋土内から中期後葉とみられる遺物が出土した。また特殊なものとしては、赤色顔料が塗布された壺がある。

[SK-1]

調査区のほぼ中央部の北壁に沿って検出した土坑である。検出した規模は、東西長1.6m、南北長70cm以上、最深部は約14cmを測る。埋土内から中期後葉とみられる壺などが出土した。

[SK-2]

調査区北西部で検出した不定形の土坑である。東西長2.3m以上、南北長2.0m以上、最深部は約12cmの規模を測る。

[SX-1]

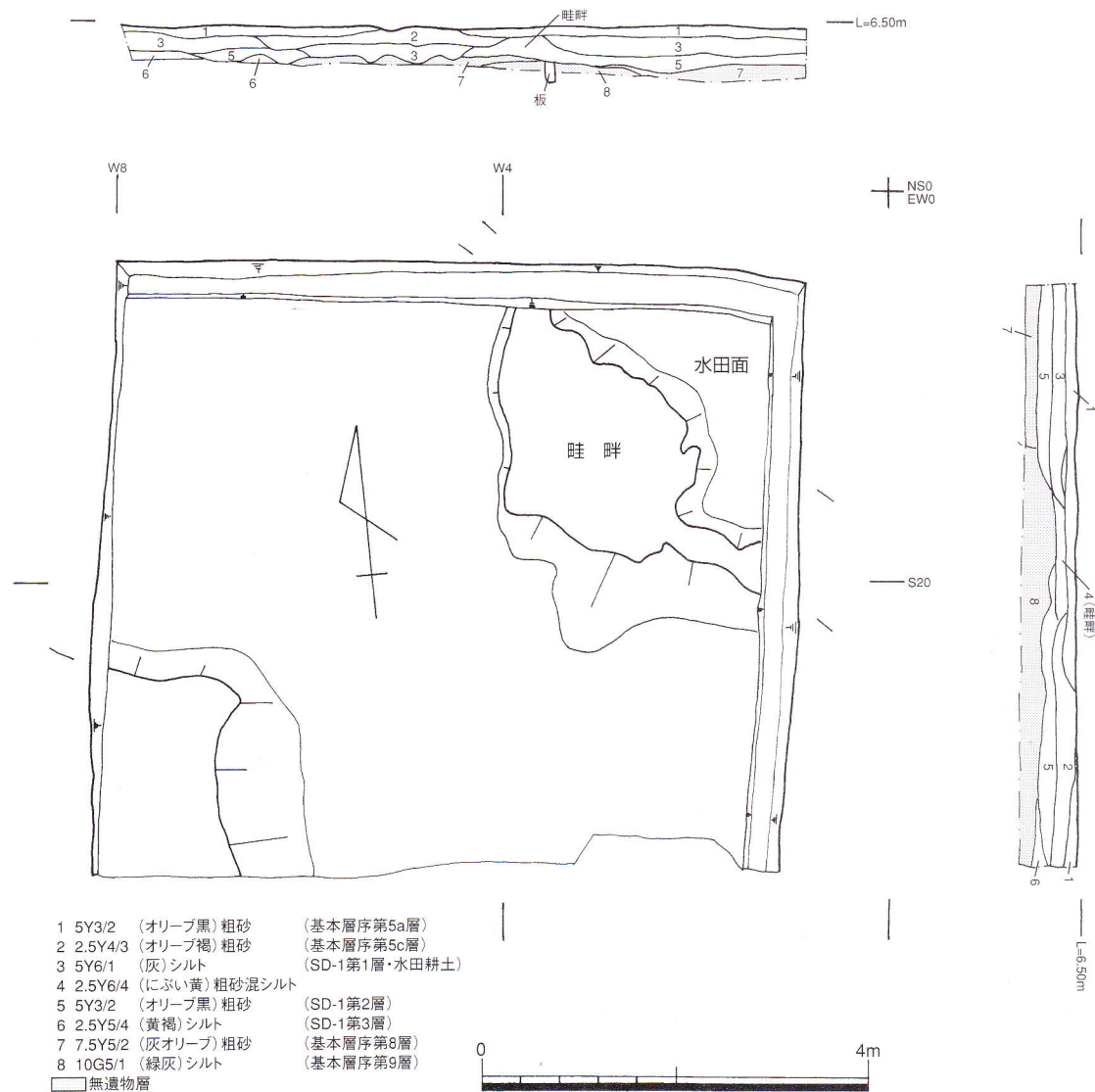
調査区西側において検出した不定形の遺構であるが、河川氾濫に伴う堆積とみられる。東西3.7m以上、南北5.5m以上、深さ10～20cmを測る。

[SX-2]

調査区西側において検出した北側に広がる不定形の遺構であるが、河川氾濫に伴う堆積とみられる。東西8.2m以上、南北3m以上、深さ約20cmを測る。

(2) 弥生時代後期の遺構

弥生時代後期の遺構としては、第2区北東隅において水田遺構を検出した。水田遺構は水田面を畦畔で囲んだ水田区画の一部であり、堆積状況からSD-1第1層上位を水田耕土として利用したものと考えられる。検出した水田区画は、東西1.8m以上、南北3.2m以上の規模を測るものである。畦畔の残存幅は約1mを測る。この水田遺構は、弥生時代の小区画水田の一部であると考えられるが、後世の削平により水田区画の規模等は不明確である。しかし、東壁土層断面の観察の結果、第2区の畦畔から南へ約5mの地点において、別の畦畔とみられる堆積を確認したことや北・西壁土層断面の観察により水田耕土とみられる第3層の水平堆積を確認した。このことから水田は、調査区東側に広がっていたことを推定することができる。また第3層堆積内から弥生時代後期の遺物が出土している。



第6図 SD-1 第1層上面遺構平面図及び土層断面図

5.遺 物

今回の調査で出土した遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、石器、木器、種子などであり、コンテナに約30箱の量である。遺構に伴う遺物の主な時期については、弥生時代中期から古墳時代前期である。

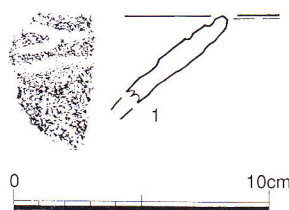
縄文時代の遺物は後期の土器1点であり、上流部からの流入した遺物であるとみられる。弥生時代の遺物は土器、石器、木器、種子などで、前期から後期にかけての各時期のものがあるが、そのなかでも特に中期後葉の時期のものが主体である。古墳時代の遺物については前期の土師器が少量出土した。

弥生時代の土器について、特に中期では壺、甕、高杯、鉢などの他、赤色顔料を塗布した壺、多孔土器、ミニチュア土器、台形土器などがある。石器については、石鏃、スクレイパー、石庖丁、叩石、磨石、砥石、石庖丁未製品などがあり、木器では板、自然遺物では種子（桃核）などが出土している。

以下、これらの遺物について、まず土器を時期別及び遺構別に記述し、次に赤色顔料を塗布した壺、多孔土器、ミニチュア土器、台形土器、土製品、石器、木器、自然遺物の順に項目を立て説明する。

（1）縄文時代の土器（第7図、写真1）

縄文土器は後期の浅鉢（1）が1点出土した。1は口縁部の破片であり、内面口縁端部に平行沈線による文様帯を施す。推定波頂部の直下には沈線を付加して平行沈線とは別の文様を施す。茶褐色で胎土は砂粒を多く含む。北白河上層式2期のものであると考えられる。



第7図 遺物実測図1



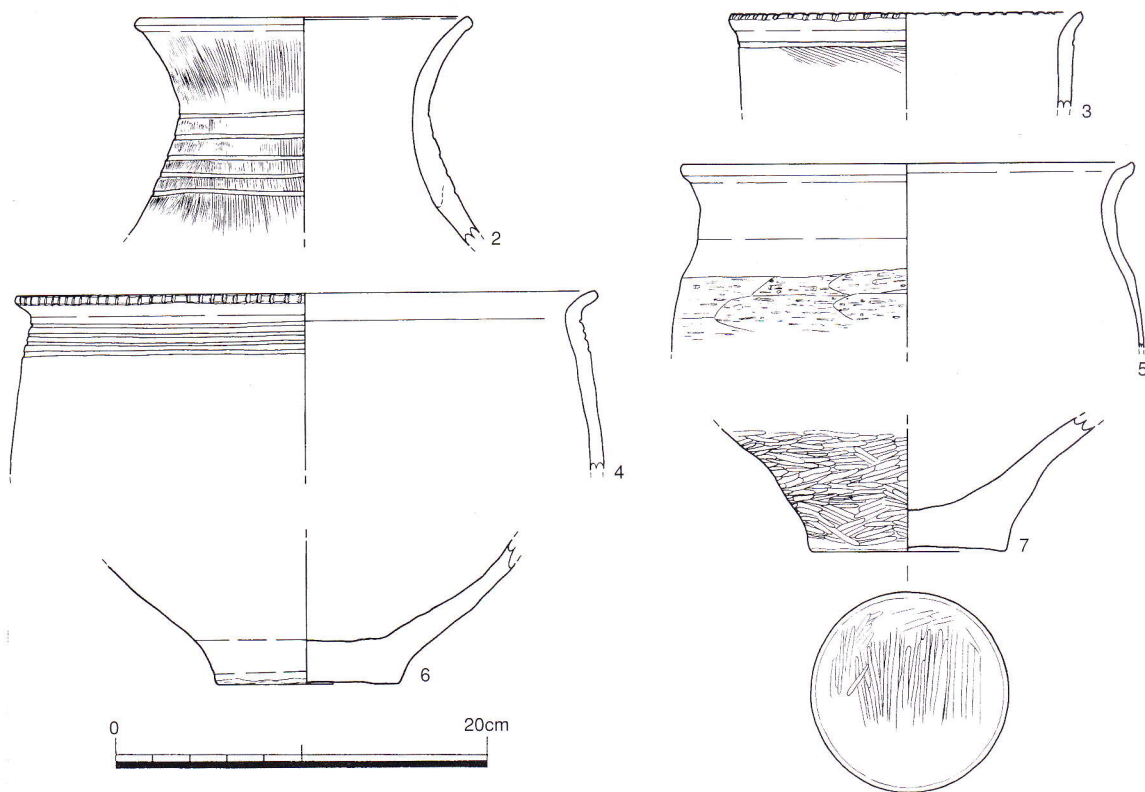
写真1 縄文土器浅鉢

（2）弥生時代前期の遺物（第8図、図版15）

2～4はいわゆる遠賀川系の土器である。2は壺であり、頸部に5条のヘラ描沈線を施す。外面には細かいタテ方向のハケを施し、内面はナデ調整を施す。

3・4は如意形の口縁部をもつ甕である。口径18.6cmを測る小形のもの（3）と口径31.0cmを測る大形のもの（4）がある。ともに口縁部直下にヘラ描沈線を施し、口縁外端面に刻目を入れる。3の外面には左上がりのハケを施し、内面はナデ調整である。胎土中には石英・チャート・雲母を少量含む。4は内外面にナデ調整を施す。胎土は比較的緻密であり、石英・雲母を一定量含む。5はいわゆる紀伊形甕である。緩やかに外反する口縁部をもち、肩部の稜はヨコ方向のヘラケズリとその上部に施されるナデによって明瞭につくりだされる。口縁端部はやや短く屈曲させ上方につまみ上げる。胎土中には細かな石英と結晶片岩を多量に含む。

6・7は壺の底部とみられる。6はやや内湾しながら立ち上がる体部をもち、内外面にナデ調整を施す。7はやや外反しながら立ち上がり、外面及び底面に丁寧なヘラミガキを施す。胎土中には長石・石英・チャート・結晶片岩を多く含む。また外面にはタール状の付着物が観察できる。



第8図 遺物実測図2

これらの土器の色調は、2・5が淡黄褐色～黄褐色を呈する以外は暗褐色を呈する。時期については2・4～7が紀伊第Ⅰ様式内に含まれるものと考えられ、3についてはやや古相を呈する。

これらはすべてSD-1の覆土から出土し、2・4・6・7が第4層から、3・5が第5層から出土した。

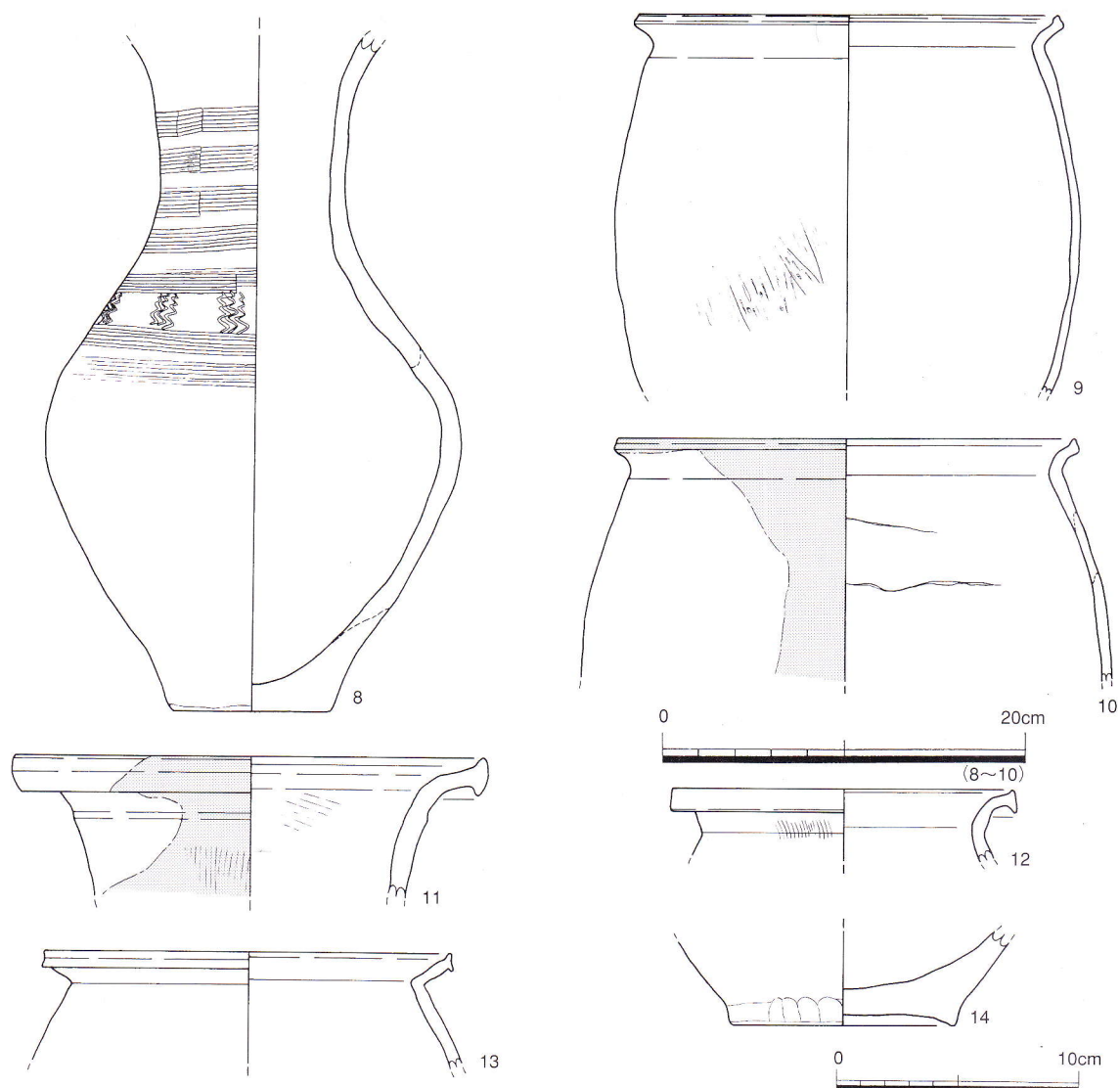
(3) 弥生時代中期の遺物

〔SK-5出土土器〕(第9図8、図版15) 8は壺である。広口長頸壺か直口壺になると思われる。残存高36.0cmを測り、胴部中位に最大径をもつ。頸部から肩部にかけて条線7本を一単位とする櫛描直線文を7条施し、肩部は3条のヘラ描沈線で構成される雷文によって加飾する。調整は不明瞭である。色調は暗褐色を呈し、さらに胎土中に長石・石英・チャートを一定量含み、結晶片岩を含まないことから他地域からの搬入品の可能性がある。紀伊第Ⅱ-2様式に比定できる。

〔SK-3出土土器〕(第9図9・10、図版15) 9・10は甕である。ともに口縁端部を上方に肥厚させ、体部中位に最大径をもつ。9は口径22.8cm、残存高20.6cmを測る。体部下半をヘラケズリした後、上半をナデ調整する。10は口径25.0cm、残存高13.0cmを測る。

これらの胎土は比較的粗く、細かな石英・結晶片岩を多く含むことから在地産のものであろう。これらはともに紀伊第Ⅲ様式のものと考えられる。

〔SK-1出土土器〕(第9図11～14、図版15) 11は広口壺である。口縁端部を上下に肥厚させ、口縁外端面は丸味をもつ。外面にはタテ方向のハケ後ナデ調整を施し、内面はナナメ方向のハケ後ナデ調整を施す。口縁部から頸部にかけて黒斑を有する。12は広口短頸壺である。口径14.4cmを測る。頸部と体部の境が明瞭であり、外面にはタテ方向のハケ調整を施す。



第9図 遺物実測図3

13は甕である。口径16.6cmを測る。口縁部は体部から「く」の字状に鋭く屈曲させ、口縁端部は上下につまみ肥厚させる。

14は底部である。底径9.0cmを測る。内外面ともナデ調整を施す。

これらの土器の胎土は比較的緻密であり、長石・石英・結晶片岩を一定量含む。これらの時期は紀伊第Ⅳ様式のものと考えられる。

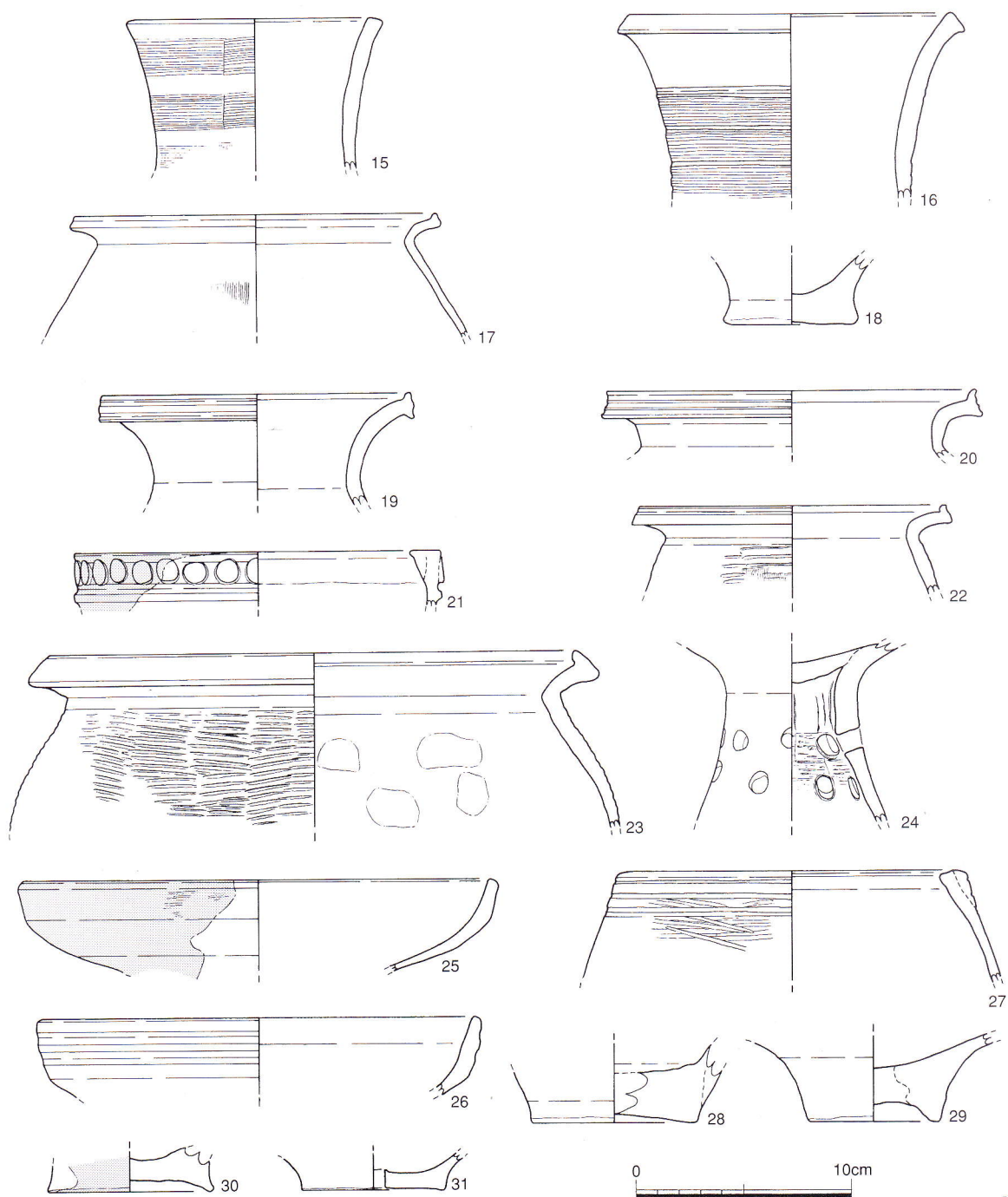
〔SX-3 出土土器〕（第10図15～18、図版16） 15・16は直口壺である。ともに頸部から口縁部にかけて数条の櫛描直線文を施す。16は緩やかに外反する頸部から口縁部にかけて、条線11条を一単位とする櫛描直線文3条を上下互いに接するように施し、さらにその直上にヘラ描沈線を一条めぐらす。口縁端部はやや下方に肥厚させる。

17は甕である。器壁は薄く、外面にタテ方向のハケが不明瞭ながら観察できる。18は甕の底部とみられる。底径5.6cmを測る。

これらの土器は、16・18は軟質で淡黄褐色を呈し、胎土は比較的粗く、石英・結晶片岩を含む。

15・17の胎土は比較的緻密でこまかな砂粒を多量に含む。これらの時期は15・16が紀伊第Ⅱ-2様式に比定でき、その他は紀伊第Ⅲ様式内に含まれるものと考えられる。

[SX-1 出土土器] (第10図19～31、図版16) 19は広口壺である。口縁端部を上下に肥厚させ、口縁外端面には幅狭の凹線文を2条施す。内外面ともナデ調整を施す。20は広口短頸壺である。口縁端部を上方に強くつまみ上げ肥厚させる。口縁外端面には3条の沈線を施す。21は直口壺の口縁部と思われる。口径14.0cmを測る。口縁部上端に粘土を貼り付け、内側に肥厚させる。また口縁外端面には円形浮文を貼り付け加飾する。



第10図 遺物実測図4

22・23は大小の甕である。ともに口縁端部を上方に肥厚させ、体部には成形段階のタタキが明瞭に残る。22は口縁端部に丸味をもつ。23は畿内通有の大型の甕である。淡黄褐色を呈する。

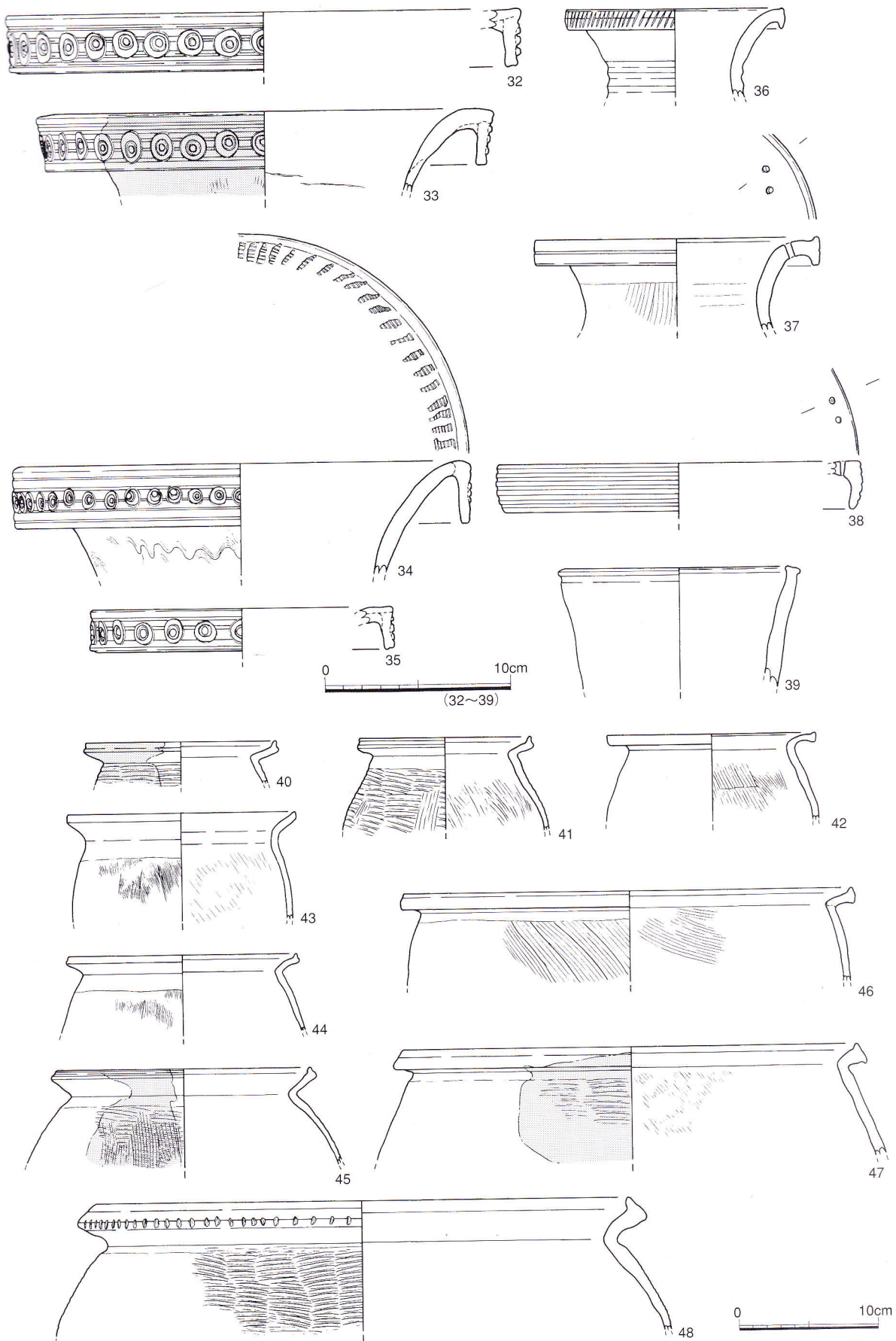
24は高杯か鉢の脚部である。上下2段に径約9mm程度の円孔を穿つもので、上段には連続する3つの円孔と反対側にそれに対応する円孔が1つ穿たれる。また下段には合計8つの円孔が穿たれる。杯部底面と脚部は円盤状の粘土を充填し接合する。内面にはヨコ方向のヘラケズリと絞り目痕が観察できる。淡赤褐色を呈する。25・26は高杯である。25は杯部より内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸くおさめるもので、黒斑をもつ。26は口縁部外面に凹線文を2条施す。

27は鉢である。口縁端部に粘土を貼り付け肥厚させ、外面にはヨコ方向のヘラミガキ後、沈線を2条めぐらす。28・29は壺の底部である。比較的厚重なものであり、29は上げ底状を呈する。30は甕の底部で、上げ底状を呈する。31は、底面中央に径約1cmの円孔が焼成前に穿たれることより、甑と考えられる。

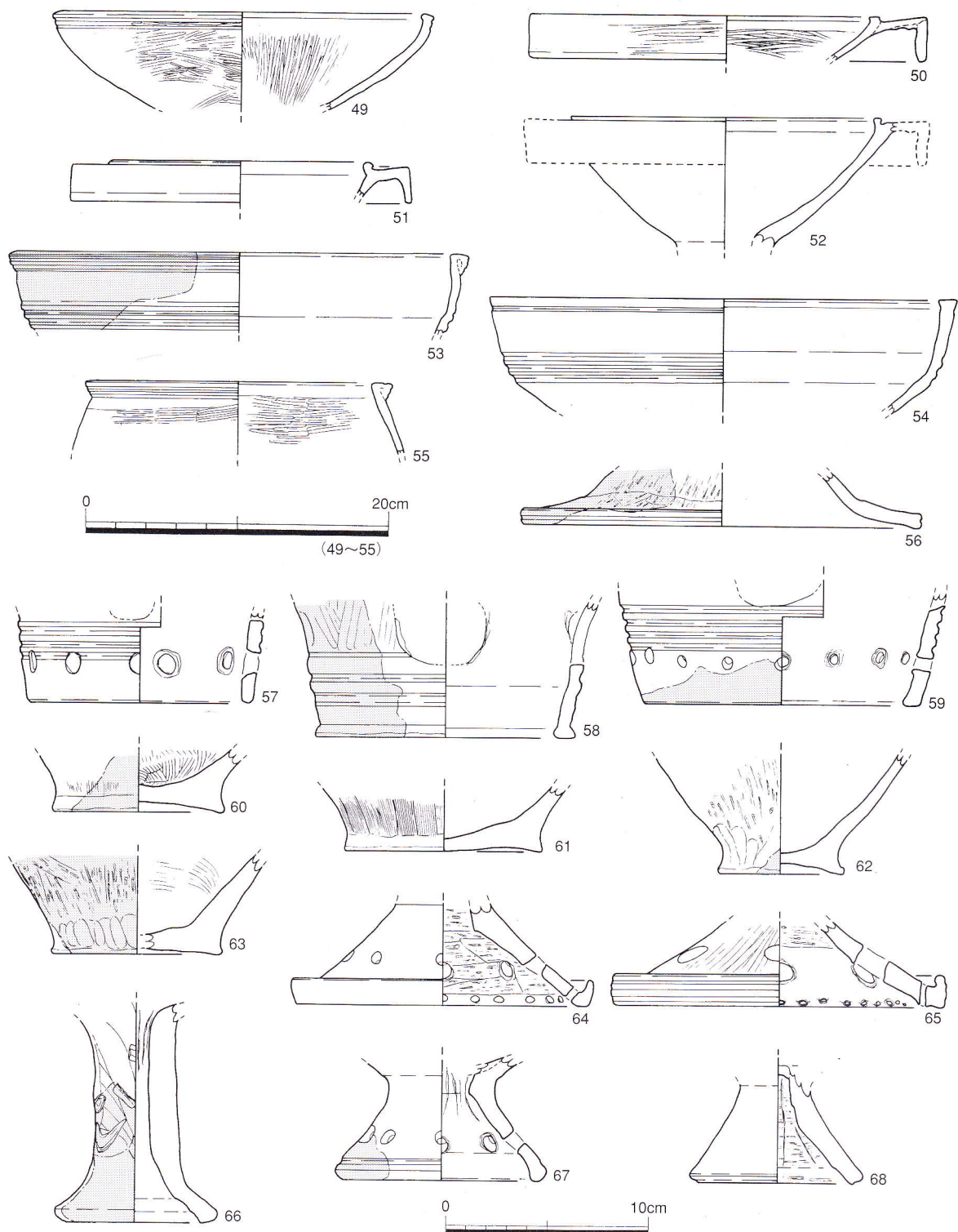
これらの土器の胎土は、比較的緻密で長石・石英・結晶片岩及び赤色軟質粒を多量に含む。これらの時期は、紀伊第Ⅳ様式内に位置付けられるものとする。

[SD-2 出土土器] (第11・12図、図版17・18) 32～35は広口壺である。すべて緩やかに外反する口縁部に垂下部を付加させるタイプである。外端面には幅狭の凹線文を多条に施し、その後円形浮文を貼り付け加飾する。垂下部の接合には2つの方法が観察され、口縁上端部に水平面をもたせ、下端部に垂下部を接合し、接合部分には下方から粘土を補充するもの(32・33・35)と、口縁上端部に水平面がなく口縁外端面に垂下部を接合するもの(34)である。その中で、34は口径23.0cmを測り、上端面には櫛描列点文を施し、口縁部直下には波状文を施す。色調は、褐色を呈する。また33の外面にはタテ方向のヘラミガキが施され、内面はナデ調整が施される。36～38も広口壺である。36は口径11.4cmを測り、口縁外端面に刻み目を施す。さらに頸部に数条の凹線文を施し加飾する。内外面はナデ調整を施す。37は口径15.0cmを測り、緩やかに外反する口縁部をもち、口縁外端面に一条の沈線を施す。また口縁上端部には径約3mm程度の円孔が穿たれる。外面には比較的粗いタテ方向のハケが施され、内面はナデ調整である。色調は明褐色を呈する。38は広口壺の垂下部である。口縁外端面には幅狭の凹線文が多条に施される。上端部には径約2mmの円孔が二つ穿孔されるが、一つは未貫通である。39は直口壺である。直線的に立ち上がる口縁部をもつ。内外面はナデ調整を施す。暗黄褐色を呈する。

40～48は甕である。甕は口径が平均約15.1cmの小形のもの(40～45)と平均約33.8cmの大型のもの(46～48)とに分けられる。その口径比は、約1:2である。まず小形の甕については、外面に成形段階のタタキが顕著にみられるもの(40・41・45)、ナデ調整を施すもの(42)、ハケ調整を施すもの(43・44)がある。41・45は「く」の字状に鋭く屈曲させた口縁部をもち、さらに口縁端部を上方につまみ上げ肥厚させる。また口縁外端面には幅狭の凹線文を施す。外面にはタタキ後部分的に粗いタテ方向のハケを施す。41は、さらに内面にナナメ方向の粗いハケが施され、色調は淡赤褐色を呈する。42は口径14.8cmを測る。体部より丸味をもって屈曲する口縁部をもち、端部を上方に肥厚させる。外面にはナデ調整を施し、内面に粗いナナメ方向のハケを施す。43は緩やかに外反する口縁部をもち、外面に細かなハケを、内面に粗いハケを施す。44はやや外方に屈曲する口縁部をもち、端部を上方に肥厚させる。一方、大型のものには外面にハケ調整を施すもの(46)と、成形段階のタタキ調整の顕著にみられるもの(47・48)がある。46は畿内通有の甕で、「く」の字状に鋭く屈曲する口縁部をもち、端部を上方に肥厚させる。外面にはナナメ方向の粗いハケを施し、内面も同様にハケ調整を施す。47



第11図 遺物実測図5



第12図 遺物実測図6

は口縁端部を上下に肥厚させ内面にはナナメ方向のハケを施す。また体部に黒斑を有する。48には口縁外端面下方に刻み目が施される。

49～52は高杯である。49は、杯部よりやや内湾しながら立ち上がる口縁部をもつもので、外面にはヨコ方向のヘラミガキが、内面にはタテ方向のヘラミガキが施される。暗黄褐色を呈する。50～52はいわゆる

る垂下口縁をもつタイプである。50は内外面ともに丁寧なヘラミガキが施される。52は、垂下部を欠失するが、緩やかに内湾しながら立ち上がる杯部が残存する。調整は剥離が著しく不明瞭である。

53～55は鉢である。53は口径27.6cmを測り、口縁端部は折り返され、三角形に肥厚する。口縁部には幅狭の凹線文を多条に施し、杯部下位には数条の凹線文を施す。54は杯部下位に凹線文を3条施すものである。色調は淡赤褐色を呈する。55は口径20.2cmを測り、口縁端部は折り返され三角形に肥厚する。口縁上端部は水平状を呈し、そこに細い沈線を一条入れる。内外面はヘラミガキを施す。色調は暗褐色を呈する。

56は蓋と考えられる。裾部が屈曲し外反するもので端部をやや肥厚させ外端面に沈線を施す。外面にはタテ方向のヘラケズリを施し、色調は褐色を呈するものである。

57～59は台付無頸壺の脚部である。やや上開き気味に立ち上がる脚部の中位に2～4条の凹線文を施すもので、凹線文を境に上下に円孔の穿たれるもの(57・59)と、上方にのみ円孔を穿つもの(58)がある。57・59は内外面ともにナデ調整を施すが、58は径底約10.6cmを測り、3条の凹線文の上方に径約4.5cmの円孔が穿たれる。また外面にはタテ方向にヘラミガキを施す。

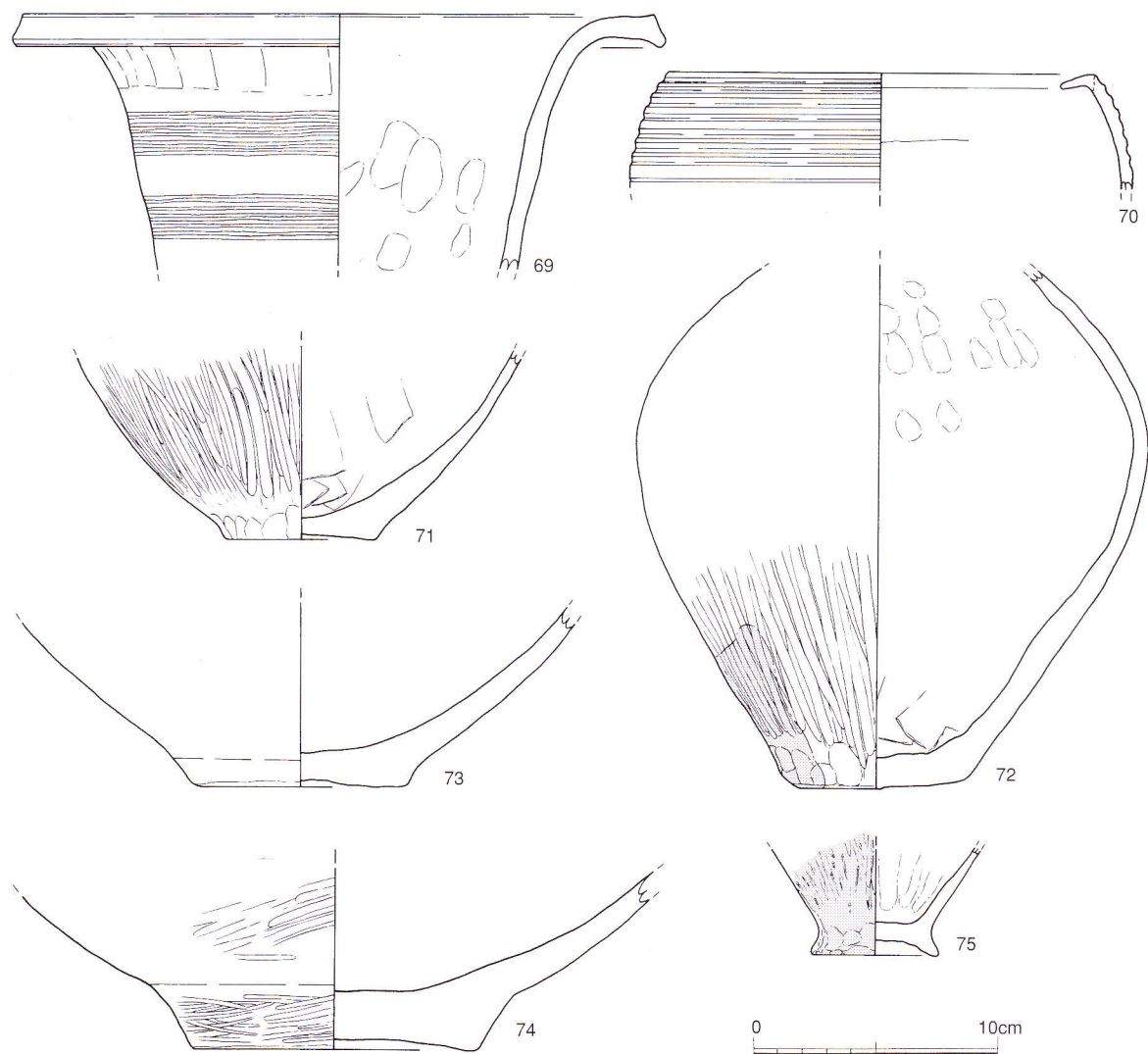
60～63は甕の底部である。60・61は外面にタテ方向の細かいハケを施す。60は内底面にクモの巣状のハケメが観察できる。また62・63はともに外面にタテ方向のヘラケズリとユビオサエを施す。62は明褐色を呈する。

64～68は高杯かあるいは鉢の脚部と考えられる。64・65はともに脚柱部から「ハ」の字状に開く脚部をもち、脚端部を上方に大きく肥厚させ丸くおさめるタイプであり、65にはさらに外端面に幅狭の凹線文を多条に施す。また脚部下端には、ともに径約3mm程度の多数の円孔が、脚部中位にはそれよりやや大きな円孔がそれぞれ穿たれる。外面の調整については、65にはタテ方向のヘラミガキを施す。内面はともにヨコ方向のヘラケズリ後、64は脚端部に、65は全面にナデ調整を施す。66は垂直に立ち上がる脚柱部から、短く「ハ」の字状に開く脚部をもち、外面にはヘラ状工具で線刻状の削痕がみられる。67・68は低脚の脚部である。67は脚端部を丸くおさめるもので、脚部中位に径約9mmの円孔が穿たれ、その下方に一条の凹線文を施す。また68は「ハ」の字状に開く脚部をもち、内面にはヨコ方向のヘラケズリを施す。67・68はともに内面上位に絞り目痕が観察できる。

これらの土器の色調は、特に触れなかったものについては淡褐色～淡黄褐色及び淡灰褐色を呈する。また胎土は比較的均一で緻密であり、胎土中には長石・石英・チャート・結晶片岩・雲母、さらに少量の赤色軟質粒を含むものである。これら時期については紀伊第Ⅳ様式内に含まれるものと考えられる。

[遺物包含層他] (第13・14図、図版19)

まず、紀伊第Ⅱ～Ⅲ様式の土器について述べる。69は広口長頸壺である。口径約25.4cmを測り、やや外反しながらのびる口縁部をさらに水平方向に屈曲させ、端部を下方に肥厚させるもので、頸部には櫛描直線文を施す。またその上方にはヨコ方向の板状工具による調整痕が観察できる。70は直口壺である。内湾する口縁端部を内側に折り曲げるもので、口縁部より多条の幅狭の凹線文で加飾している。色調は灰白色を呈する。71～74は壺の胴部と底部である。72は底径6.8cm、残存高20.8cmを測り、胴部中位に最大径をもつ。外面は底部付近にタテ方向のヘラミガキとユビオサエが施され、内面には底面付近にクモの巣状のハケメを施す。肩部にはユビオサエが観察できる。71は底部付近のみではあるが、72と同様の調整が施される。外面にはタール状の付着物がみられる。73・74はやや大形の壺の底部とみられ、ともに内湾しながら立ち上がる。74は底径11.4cmを測り、体部へはやや外方に屈曲させながら立ち上がる。底部外面には成形段階のケズ



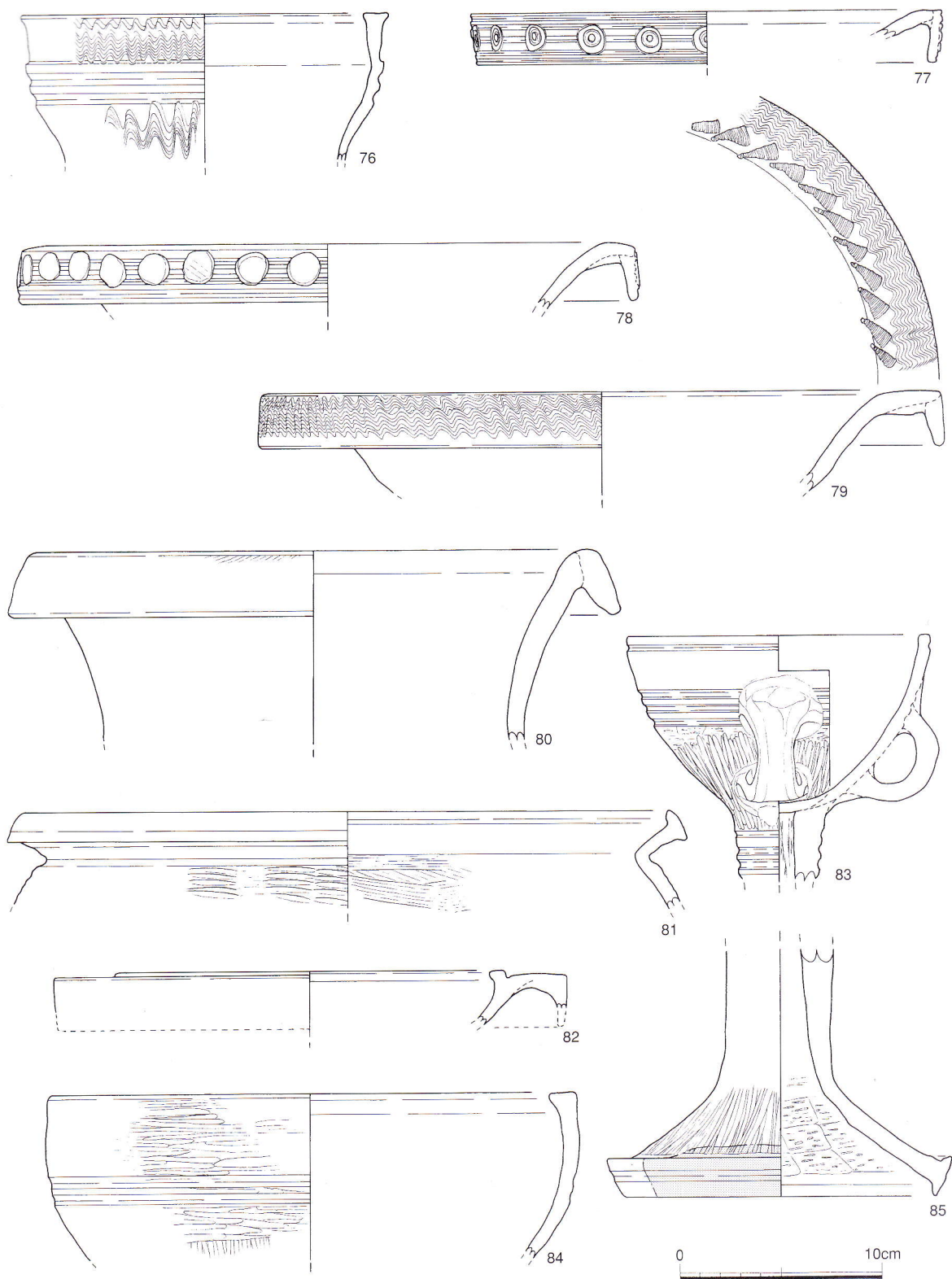
第13図 遺物実測図7

り後、底部及び底面にヨコ方向のヘラミガキが施される。色調は赤褐色を呈する。

75は紀伊形甕の底部と考えられ、上げ底状を呈し直線的にのびる体部をもつ。外面にはヘラケズリが施される。

これらの土器の色調は、既述した以外のものは淡褐色～淡黄褐色を呈し、またこれらの胎土は比較的緻密で均一であり、細かな長石・石英・チャート・結晶片岩を多量に含むことから在地産のものであろう。時期については69が紀伊第Ⅱ-2様式に、その他は紀伊第Ⅲ様式内に含まれるものと考えられる。

次に紀伊第Ⅳ様式の土器について述べる。76は直口壺である。やや屈曲しながら立ち上がる口縁部をもち、屈曲部には2条の凹線文を施す。また凹線文を境に上方に波長の短かな波状文が、下方に波長の長い波状文を施し加飾する。77～80は広口壺の口縁部であり、垂下部の接合方法についてはSD-2 出土広口壺(33・34他)と同様に2タイプある。77・78はともに円形浮文を貼り付けるもので、77には竹管文を施す。79は、やや内湾気味に立ち上がる口縁部を水平方向に屈曲させ垂下部をもつものである。外端面には2条の波状文が施され、上端面には波状文及び扇形文を施し加飾する。80は緩やかに外反する口縁部から斜め下方に垂下する垂下部をもつ。口縁部上端に僅かながらハケ調整が観察できた。色調は明褐色である。



第14図 遺物実測図8

81は甕である。口径31.4cmを測り、口縁端部を上下に肥厚させる。外面は成形段階のタタキが顕著に観察でき、内面はハケ調整を施す。色調は赤褐色を呈する。

82は垂下口縁をもつ高杯である。

83・84は鉢である。83は脚台付の把手付鉢で、体部は内湾しながら立ち上がり口縁端部を丸くおさめるもので、口縁部直下に一条と体部中位に3条、さら脚柱部にも数条の凹線文を施す。外面は体部上位にナデ調整が施され、中位の凹線文までの体部下半をヨコ方向のヘラケズリ後タテ方向のヘラミガキを施す。内面は丁寧なナデ調整が施される。把手は体部下半に一箇所だけみられる。色調は淡赤褐色を呈する。84は口径23.2cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を内側にやや肥厚させている。また体部中位に凹線文を2条施し、その上方にはヨコ方向のヘラミガキを施し、下方はタテ方向のヘラミガキ後ヨコ方向のヘラミガキを施す。色調は黒灰色を呈する。

85は、高杯の脚部である。脚柱部より「ハ」の字状に開く脚部をもち、端部を上下に肥厚させ、外端面はやや凹ませる。脚部外面はタテ方向のヘラミガキを施し、内面は全面をヘラケズリした後、端部付近をナデ調整する。

これらの土器の色調は、既述したもの以外については淡褐色～淡黄褐色を呈し、またこれらの胎土は比較的均一で、緻密であり、胎土中には長石・石英・チャート・結晶片岩を多量に含む。時期については、すべて紀伊第Ⅳ様式内に含まれるものと考えられる。

これらの土器は、SD-1の覆土と遺物包含層から出土したものであり、SD-1の第4層からは72・74・76・78・83・85が、第5層からは69・71・77が、第6層からは70・84が出土した。また、遺物包含層第5層からは75・79・80・81・82が出土した。

(4) 弥生時代後期の遺物 (第15図86～88、図版19・20)

86は口径18.6cmを測る。口縁部はやや屈曲させながら外反するもので、端部を上方につまみ上げる。外面には成形段階のタタキが顕著に観察でき、内面は板状工具によるナデ調整が施される。色調は淡黄褐色を呈する。

87は甕か鉢の底部と考えられ、外面には成形段階のタタキが施され、内面はナデ調整が施される。色調は暗褐色を呈する。

88は高杯の脚部と考えられるもので、脚端部は「ハ」の字状に張りだし端部を丸くおさめる。外面にはタテ方向のヘラケズリを施し、内面も同じくヨコ方向のヘラケズリが施される。

これらの土器の胎土は比較的緻密であり、細かな長石・石英・結晶片岩を含む。時期については紀伊第Ⅴ様式内に含まれるものと考えられる。

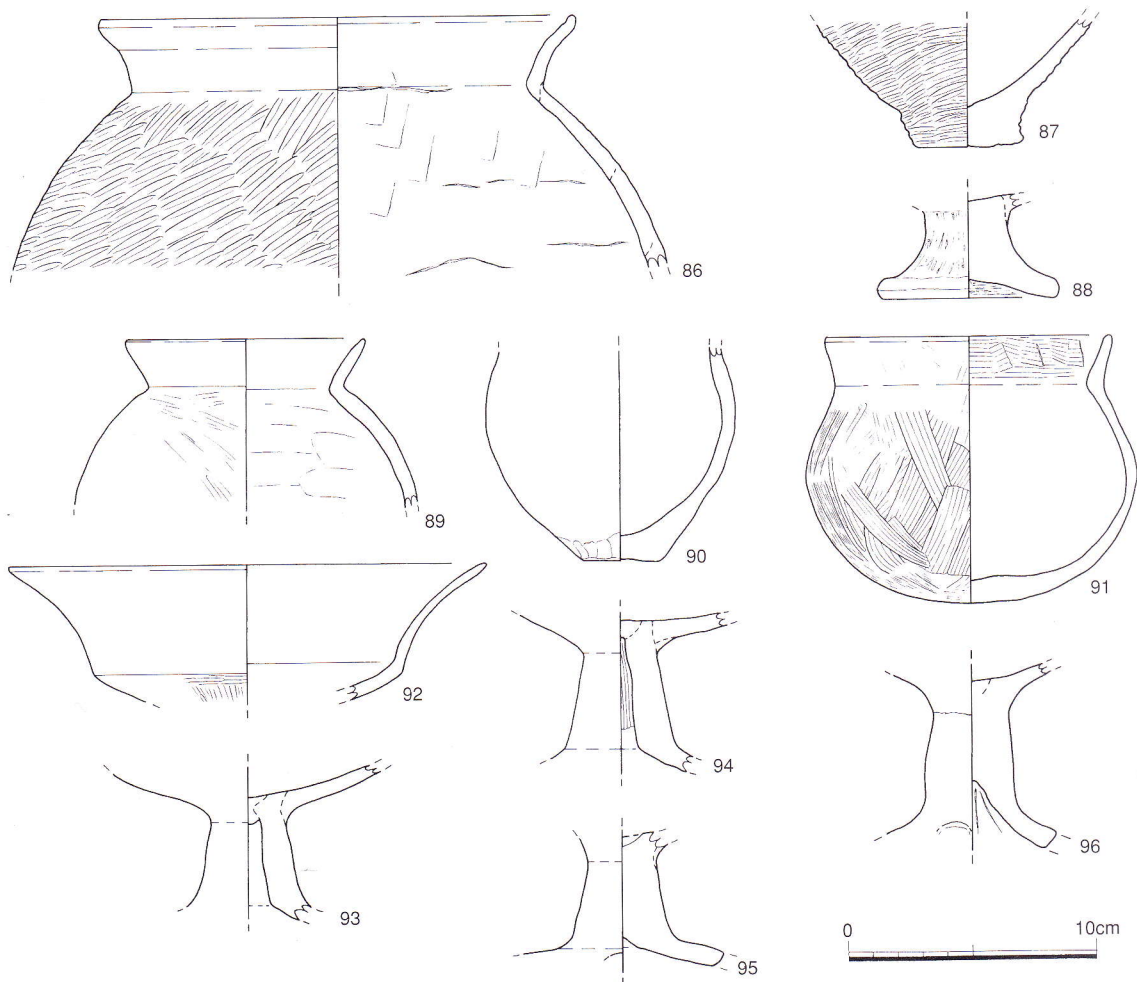
これらはすべてSD-1の覆土から出土したものであり、86が第4層、その他は第5層から出土した。

(5) 古墳時代前期の遺物 (第15図89～96、図版20)

89は小形丸底壺である。口径9.5cmを測る。短く直線的にのびる口縁部をもち、体部は球形を呈する。外面にはナナメ方向のヘラミガキが施され、内面はヨコ方向のナデ調整を施す。色調は灰褐色を呈する。

90は口縁部を欠失するもので、甕か鉢になると思われる。体部は成形段階のタタキがナデ調整によって消され、内面はナデ調整を施す。淡黄褐色を呈する。91は甕である。口径11.3cmを測り、直線的に上方にのびる口縁部をもつ。外面はタテ方向のハケを施し、口縁部付近をヨコ方向にナデ調整する。内面は口縁部付近にヨコ方向のハケが施され、体部をナデ調整する。体部は球形で、色調は暗褐色を呈する。

92～96は高杯の杯部と脚部である。92は高杯の杯部である。内湾する杯部から長く外反する口縁部



第15図 遺物実測図9

をもち、杯部はタテ方向のヘラミガキ後ヨコ方向のヘラミガキを施す。色調は淡黄灰色を呈する。脚部は中空のもの（93・94）と中実のもの（95・96）があり、脚柱部から大きくラップ状に開く脚部をもつもの（93・94・96）と、やや扁平に開く脚部をもつ（95）がある。脚部と杯部の接合方法は、93・94の中空脚部においては、脚柱部を製作した後外側面に杯部を接合し、その後脚柱部上方より円板状の粘土をつめ杯部底面をつくる。93では脚柱部内面に粘土がヘソ状に突出する。また絞り目痕も観察できる。95・96は中実の脚部で脚部には円孔が穿たれる。また96の脚柱部は胴張り状の形態をもち、内面には絞り目痕が残る。色調は、淡黄褐色を呈する。

これらの土器の色調は、文中で触れたもの以外については赤褐色～淡赤褐色を呈する。また、胎土は極めて精良であり、長石・石英・赤色軟質粒を少量含む。焼成は良好である。時期については、90が庄内式併行期に、その他は布留式併行期に位置付けられる。

これらはすべてSD-1の覆土から出土したものであり、第4層からは90・92・93・95・96が、第5層から86が、第6層から91・94が出土した。

(6) 赤色顔料を塗布した壺

(巻頭図版1、第16図、写真2)

赤色顔料を塗布した壺は細頸壺と考えられ、体部上半の頸部から肩部にかけての破片が2点出土した。97は肩部に凹線文を7単位以上施すものであり、内面の凹線文に対応する部分にヨコナデがみられ、ヨコナデ上部の頸部に近い部分にシボリ目を観察することができる。外面全面に赤色顔料を塗布している。赤色顔料は未鑑定であるが、暗赤色に発色することなどからペンガラが用いられたものと考えられる。SD-2から出土したものである。写真2-aはSD-1の第2層から出土したものであり、97と同一個体であると考えられる。塗布された赤色顔料は風化のために黒変している。共伴資料から紀伊第Ⅳ様式のものであるといえる。

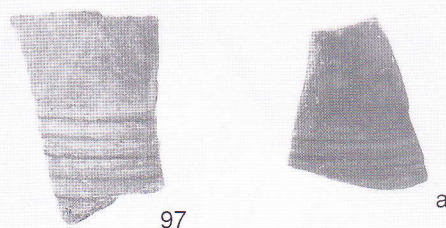
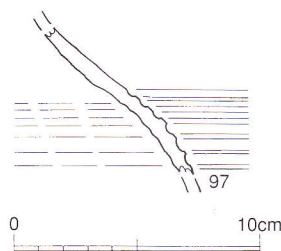


写真2 赤色顔料を塗布した壺



第16図 遺物実測図10

(7) 多孔土器 (第17図、図版21)

多孔土器(98)は1点出土した。焼成は良好で、明褐色に発色し、黒斑を1箇所もつものである。体部最大幅8.8cm、器高8.4cm、底径4.0cm、口径7.0cmを測り、体部下半及び底部に径0.5cmの穿孔がみられる。体部下半の穿孔は上下方向に1列3単位で3列以上、底部には1箇所以上施される。内面には縦方向のナデ、外面体部下半に下から斜め左上部方向にケズリがみられ、口縁部周辺はヨコナデで仕上げるものである。SK-1から出土したものであり、共伴資料から紀伊第Ⅳ様式のものであると考えられる。

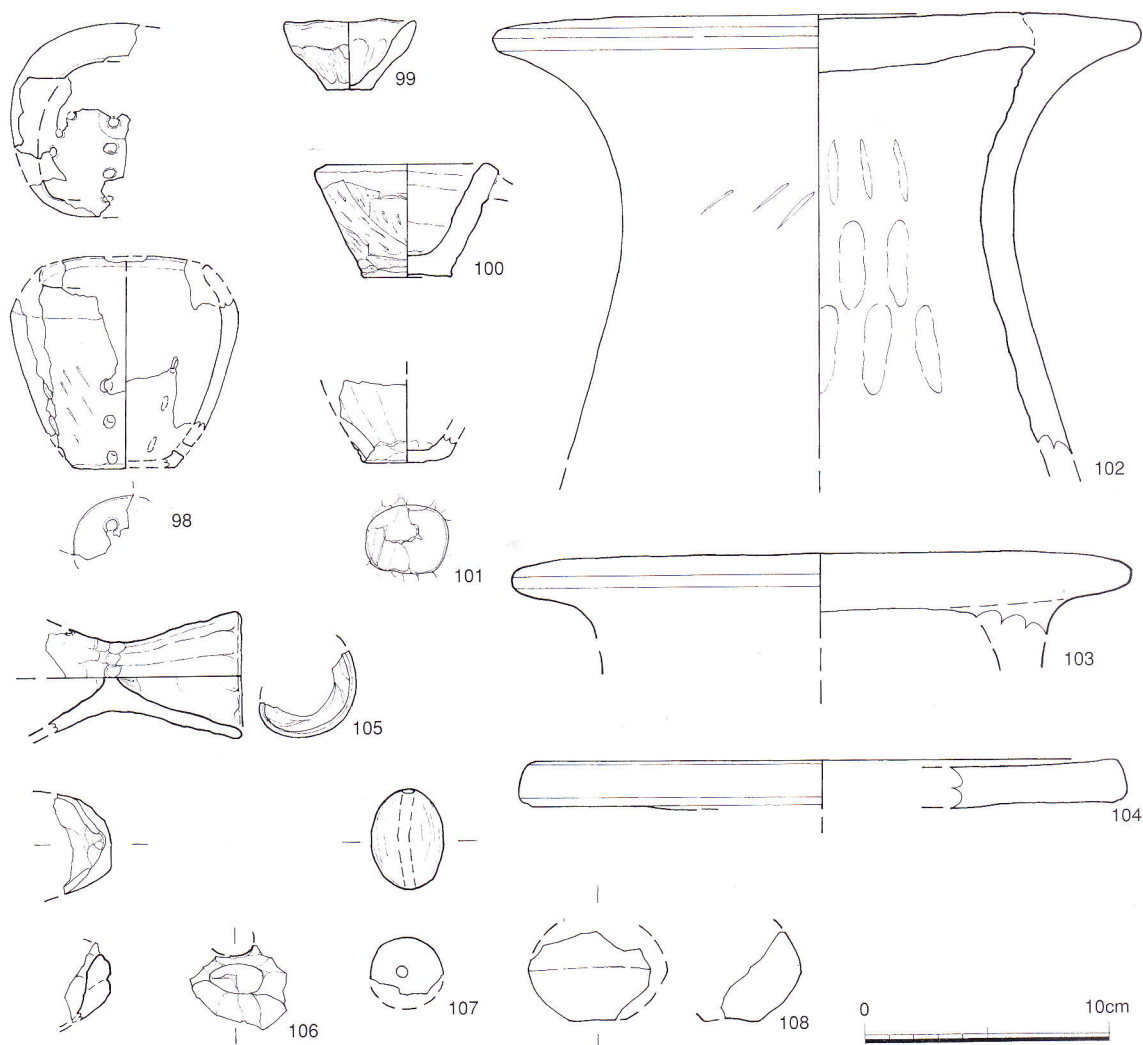
(8) ミニチュア土器 (第17図、図版21)

ミニチュア土器(99～101)とみられるものは3点出土した。99・100は鉢である。99は淡褐色で、黒斑を1箇所もつものであり、口径5.2cm、器高2.7cm、底径1.8cmを測る。外面下半部は下から上方向へのケズリ、内面は上下方向のナデ、口縁部はヨコナデ調整で仕上げるものである。100は淡黄灰色のもので、黒斑を1箇所もつ。口径6.2cm、器高4.5cm、底径3.6cmを測る。外面下半部は下から上方向へのケズリ、内面は上下方向のナデ、口縁部はヨコナデ調整で仕上げるものである。99と同様、外面下半部は下から上方向へのケズリ、口縁部はヨコナデ調整を施すものである。しかし、内面については横方向のナデで仕上げるものである。99・100共に手づくね成形で製作されたものとみられる。101については器種不明であるが、ミニチュア土器の一群と考えられる。底径3.2cm、残存高3.3cm、残存幅5.4cmを測り、手づくね成形でナデとオサエで製作されたものである。黒斑が1箇所みられる。

(9) 台形土器 (第17図、図版22)

台形土器とみられるものは5個体分を確認することができた。図化したものは3点(102~104)であるが、他に103と同タイプの台部1点と外面にタタキのみられる脚部(図版22a、b)がある。

102は脚部の下端部を欠失するが、全形を窺い知ることのできる資料である。淡褐色で砂粒を多く含む胎土であり、円盤の側面に粘土を巻き上げて成形したものである。外面はナデ、内面については台部分の裏面はナデ、内側面は指オサエ及びシボリ目を観察することができる。台部径25.6cm、残存高17.6cmを測る。103は台部分であり、脚部を欠失するものである。102とは違い、台部円盤の面上に脚部を直接貼り付けるものである。赤褐色に発色し、胎土中に砂粒を多く含むものである。台部径24.6cm、残存高3.3cmを測る。104は台部である。台部円盤の面上に取り付いたはずの脚部の痕跡は剥離のため観察することができない。側面端部に面取りを行うものであり、台部径24.2cm、残存高1.9cm、厚さは1.7cmを測る。その他、外面にタタキのみられる脚部(図版22a、b)1個体分がある。これは103・104と同様に台部円盤の面上に脚部を直接貼り付けている。脚部側面はタタキにより器壁を薄く調整し、接地部分の端部は粘土を内側に折り返して玉縁状を成すものである。



第17図 遺物実測図 11

(10) 土製品 (第17図、図版21)

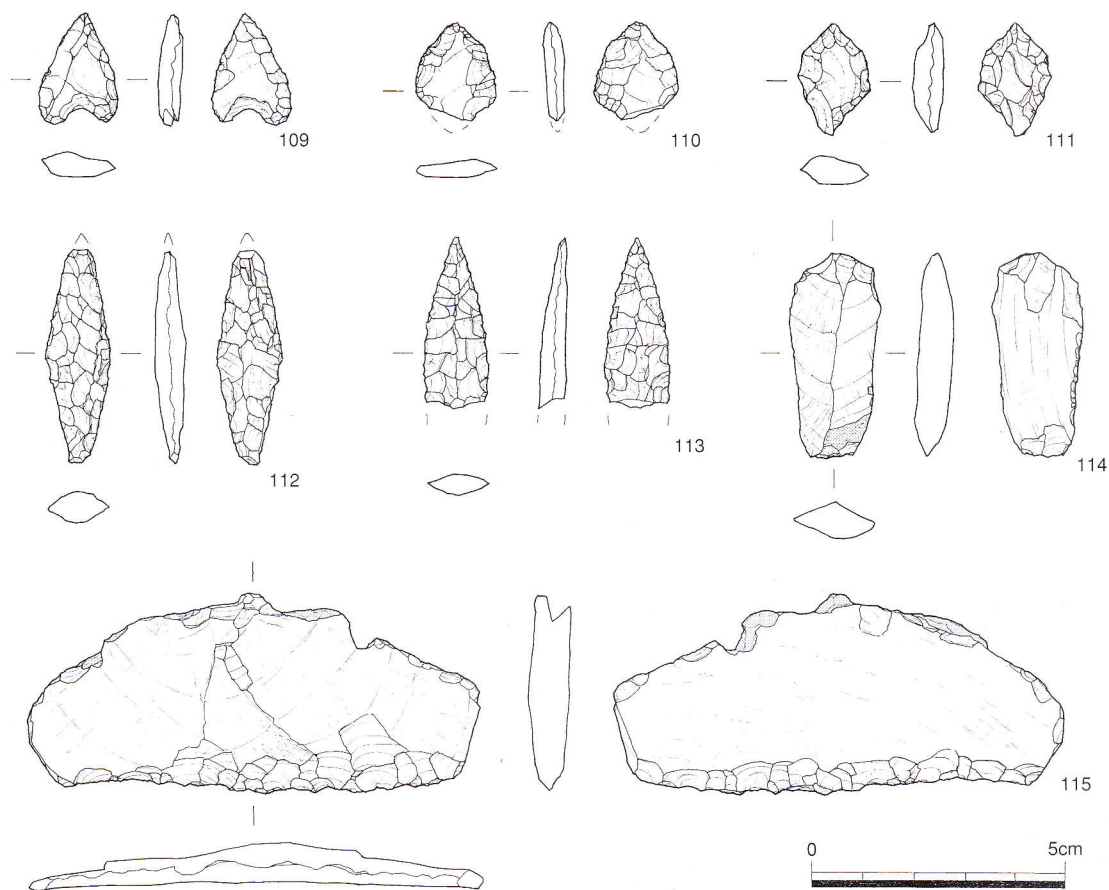
土製品では、形象的なものと考えられるが良くわからない不明品 (105、106) が2点、土玉が2点 (107、108) 出土した。

105は径5.0cmを測るラッパ状に開く部分と反対側を袋状にした部分とから成る。袋状の部分は完存していないが、内面が黒色であり、上部に径0.4cmの穿孔が1箇所みられる。外面及びラッパ状に開く部分の内面は淡茶褐色であり、胎土は緻密である。ラッパ状に開く部分にマキアゲ痕がみられ、内面にナデとオサエ、外面に板状工具によるとみられるナデ調整を観察することができる。最大幅5.0cm、残存長7.7cmを測るものである。106は105と同様袋状になるもので、手づくね成形で製作されており、外面はナデ調整で仕上げるものである。淡褐色で胎土に少量の砂粒を含む。上部に径約1.4cmの孔部をもち、残存幅4.0cm、残存長1.9cm、残存高3.1cmを測る。105と106は鳥形土製品の可能性がある。

107は瓜形の土玉であり、淡黄褐色で、黒斑が1箇所みられる。最大径3.0cm、長さ4.0cm、重さ23.9gを測るものである。貫通する径0.4cmの孔がみられ、穿孔は両側から行っている。108はそろばん玉状の土玉で、暗灰褐色で胎土に砂粒を多く含む。手づくね成形で製作されており、ナデとオサエで調整されている。最大径5.6cm、残存幅3.5cmを測るものである。

(11) 石器 (第18・19図、図版23・24)

109～113はサヌカイト製の打製石鏃である。109は凹基式で長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ5mmを測る。両面に大剝離面を残しており、板状の素材剥片の右側辺を中心に基部から先端部に向けて細部調整し



第18図 遺物実測図12

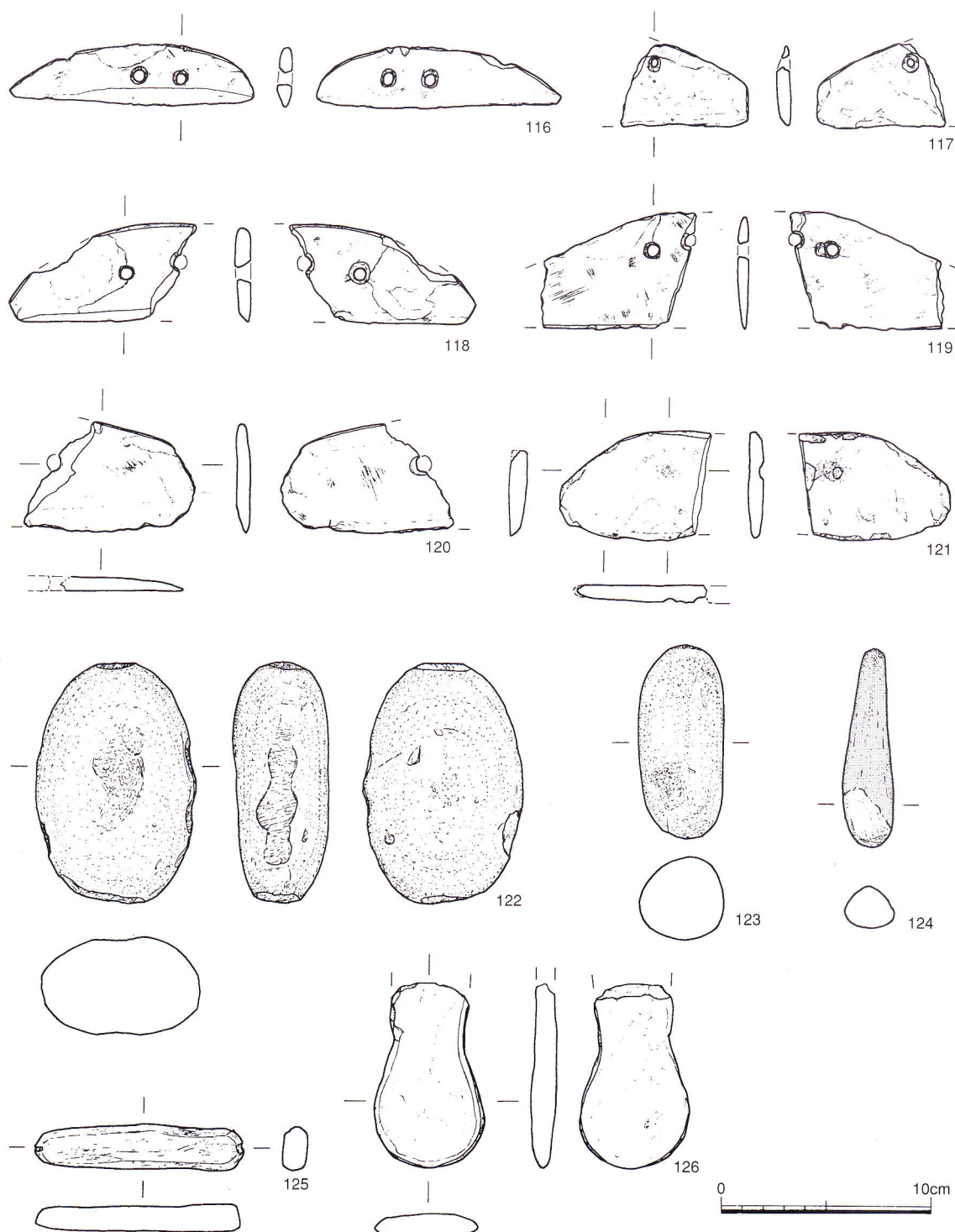
ている。また切り合いから調整の順序は、右面の後左面である。110は凸基Ⅰ式の石鏃で、残存長2.0cm、幅1.6cm、厚さ4mmを測るものである。左面は右回り、右面は基部から先端部に向けて細部調整が施される。調整順序は右面右側縁→同左側縁→左面左側縁→同右側縁である。111～113は凸基Ⅱ式の石鏃である。111は長さ2.3cm、幅1.4cm、厚さ6mmを測るもので、やや厚みのある素材剥片から製作されている。左面は左回り、右面は先端部から基部に向けて調整を施す。調整順序は右面右側縁→同左側縁→左面右側縁→同左側縁である。112は調整剥離を全面に施すもので、残存長4.2cm、幅1.3cm、厚さ6mmを測る。左面は左回り、右面は基部から先端部に向けて調整剥離が行われており、切り合い関係から右面の後に左面を調整したと考えられる。調整順序は右面左側縁→同右側縁→左面右側縁→同左側縁である。113は丁寧な平行調整を施すものである。基部を欠損しているため、有茎式の可能性も残る。残存長3.4cm、幅1.3cm、厚さ5.5mmを測る。左面は基部から先端部、右面は右回りの方向で調整剥離が行われている。調整順序は左面右側縁→同左側縁→右面左側縁→同右側縁である。以上の石鏃の重量は、それぞれ1.6g、1.2g、1.7g、2.7g、1.7gを量る。なお遺物の出土位置は、110はSD-2、111はSX-2、109は第5層、112・113は第4層である。

114・115はサヌカイト製のスクレイパーである。114は右面の右側縁及び下縁に調整剥離を施し、刃部を作り出している。長さ4.1cm、幅1.8cm、厚さ7mm、重量は5.9gを量る。115は板状の素材剥片に両面からのウロコ状細部調整を施すことにより、直線的な刃部を作り出している。調整は両面とも右から左に向けて進行しており、切り合いから左面の後右面を調整したものと考えられる。また上端部は自然面を多く残しており、その左右の縁辺部には調整の後に歯潰しを施す。長さ9.0cm、幅3.9cm、厚さ7.5mm、重量は31.8gを量る。出土位置は114・115共にSD-1である。

116～120は結晶片岩製の磨製石庖丁である。116は直線刃で半月形を呈するタイプである。刃部の範囲は紐孔近くまで及んでおり、研磨を繰り返しながら使用されたことがうかがえる。また刃部は両面から研磨されるが、明確な稜を持つのは左面である。長さ11.6cm、幅2.8cm、厚さ6.5mmで重量は33.3gを測る。117は片刃で、全体的に台形状を呈するものと考えられる。紐孔の上方には欠損の後も研磨を施した様子が観察できる。厚さ6.5mmを測り、紐孔は内径4mm、外径7mmとやや小さめである。118は幅4.7cm、厚さ8mmを測る。片刃で、端部付近には両面とも著しい磨滅がみられる。119は幅5.5cm、厚さ5mmを測る。刃部は紐孔より下の広範囲を両面からの研磨によりなだらかに作り出されるため、明確な稜は認められない。120は厚さ6.5mmを測る。以上の石庖丁の内、116・118・119の紐孔は内径6mm、外径8mm前後で共通しており、同一工具を使用した可能性が考えられる。なお遺物の出土位置は、118～120はSD-1、116・117は第4層である。

121・図版23のa・bは結晶片岩製石庖丁の未製品である。121は穿孔途中に折損したとみられる石庖丁の未製品で、幅5.1cm、厚さ7mmを測る。穿孔作業の前段階において、全体の研磨と刃づけを行っている点で注目されるものである。また穿孔作業は裏面から行っており、穿孔位置に細かい敲打によって窪みを作った後に錐を用いている。aは全面を研磨しているが、刃の角度は鈍く、穿孔の痕跡がみられないことから未製品の可能性が残る。bは器形調整段階のもので、2つに折損した未製品の接合資料である。階段状剥離を施した後、片面のみに荒い研磨を行い、形を整えている。接合部には敲打による窪みがみられることから、穿孔作業の際に折損したものとみられる。なお遺物の出土位置は、121はSD-1、aはSD-2、bはSX-1である。

122・123は砂岩を用いた叩石である。122は楕円形の河原石を使用しており、法量は長さ11.3cm、幅7.6cm、厚さ4.5cm、重量は580gを量る。両面の中央部には敲打痕、上下左右の側縁部には磨痕が認められる複合石器であり、磨痕の観察から上下の側縁部は不定方向、右側縁は一定方向、左側縁はローラー状に回転させて使用されたと考えられる。123は長さ9.2cm、直径3.8～4.0cm、重量は210gを量るもので、上下面を敲打に使用している。また砂岩以外の石材では、石英（図版24・a）やチャート（図版24・b）を用いた叩石も存在する。共に球形の礫を使用しており、端部には敲打痕がみられる。なお遺物の出土



第19図 遺物実測図13

位置は、122はSX-1、123・a・bはSD-1である。

図版24のc・dは結晶片岩を用いた砥石である。共に全面を研磨に使用しており、そのほとんどの面は光沢を持っている。cは砥石自体を動かして使用するタイプ、dは固定して研磨の対象物を動かして使用するタイプである。法量は、cは長さ8.7cm、幅7.7cm、厚さ3.8cm、dは長さ25.3cm、幅11.8cm、厚さ10.7cmを測り、重量はそれぞれ400g、5.42kgを量る。出土位置は共にSD-2である。

124は砂岩を用いた棒状の磨石である。下面とその周辺に磨痕がみられる。全体的に磨滅しており、付着物により大部分が黒色を呈している（スクリーントーン部分）。法量は長さ9.3cm、幅2.4cm、厚さ1.9cm、重量は51.3gを量る。出土位置はSD-2である。

125は結晶片岩製の棒状石製品で、長さ9.9cm、幅2.1cm、厚さ1.3cm、重量は46.3gを量る。両端にノッチがみられることから切目石錘の可能性が高いと思われるが、通常の切目石錘に比べて切り込みは浅い。出土位置はSK-3である。

126は結晶片岩製の舌状を呈する石製品である。法量は残存長8.8cm、幅5.2cm、厚さ1.2cm、残存重量は72.5gを量る。全体に荒い研磨を行った後、くびれより下部に研磨を施し刃部を形成している。形態から土掘り具の一種である可能性が考えられる。出土位置はSD-1である。

（12）木器

木器ではSD-1の最下層である第3層から手斧の柄とみられる未製品や板材などが出土した。板材については、幅11.0cm、厚さ2.7cm、残存長71.5cmを測るものであり、建築部材と考えられる。

（13）自然遺物

自然遺物については種子、自然木などがSD-1から出土した。自然木には加工痕のみられるものが含まれる。種子類は桃核などが少量出土した。

【参考文献】 土井孝之「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年』 近畿編Ⅰ 木耳社 1989年

6.まとめ

今回の調査について、遺構の変遷を弥生時代中期、後期、古墳時代前期の3時期に区分することができる。また赤色顔料を塗布した壺など特徴的な遺物が出土し、岡村遺跡の弥生時代の微高地北東限と旧河道の一部（SD-1）を検出した。以下、項目毎に説明する。

（1）遺構の変遷について

今回の調査で岡村遺跡において弥生時代中期の旧河道1条（SD-1）・溝1条（SD-2）・土坑5基と後期の水田遺構（畦畔、水田面）を検出した。

調査地は弥生時代を通じて西側部分は微高地、東側は微低地であったものと考えられる。以下、弥生時代中期、後期、古墳時代前期の時期別に遺構変遷を説明する（第20図）。

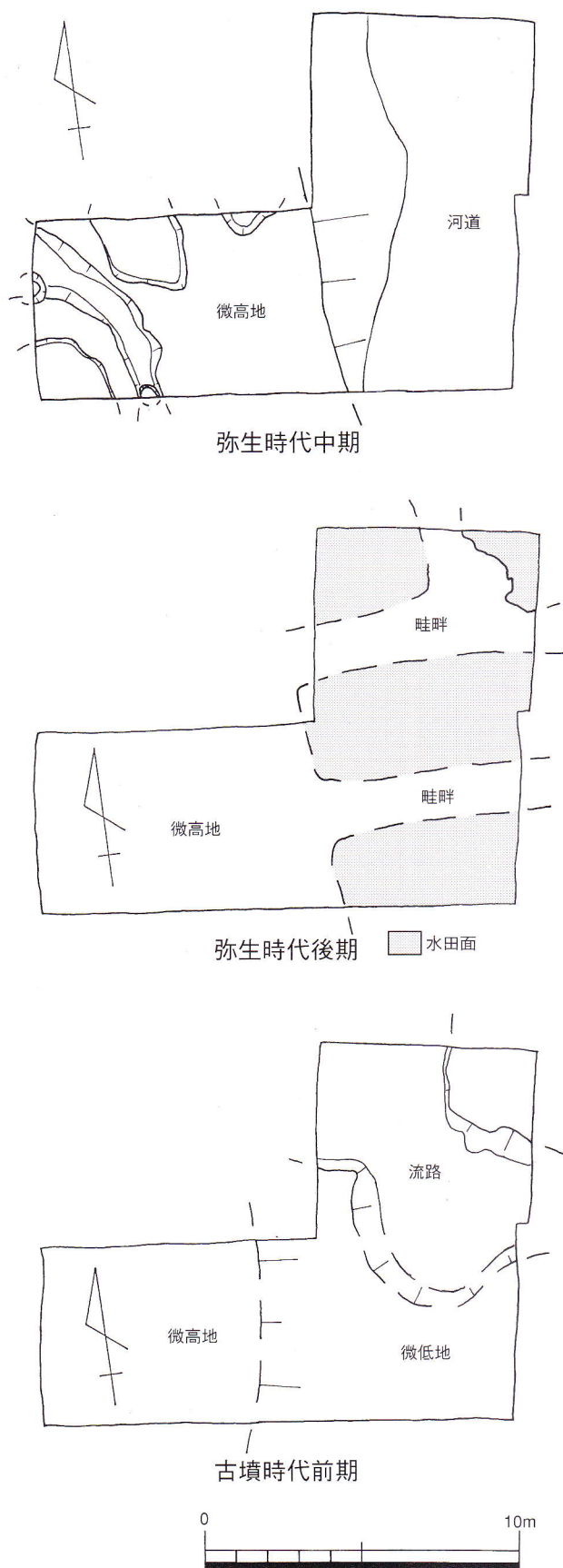
先ず、弥生時代中期の遺構は西側微高地上に展開しており、東側については微高地縁辺部に掘削さ

れた河道（SD-1）内であった（第20図上）。微高地上の遺構群の性格は不明であるが、土器を多く出土することなどから集落縁辺部に相当するものであると考えられる。

後期には東側の旧河道（SD-1）の埋没が進行して微低地となり、その微低地部分の水田として開発したものとみられる。西側微高地上については、この時期の遺構は認められない。水田遺構については古墳時代の河道氾濫による流路の貫入によって水田面の多くの部分を失っているが、調査区北東隅に検出した畦畔及び水田面を基に壁面土層の堆積状況の観察所見を加えて、図中に推定復原案を示した（第20図中）。水田は小区画水田であり、1区画は幅4m、長さ7～8mの単位面積約30m²を推定することができ、太田・黒田遺跡第26次調査検出の弥生時代中期の小区画水田（第21図）^{（註1）}に類似するものである。畦畔の高さは削平を受けたため不明であるが、基底幅について、東西方向のものは1.0m～1.2m、南北方向のものは約0.8mを測る。水田遺構は西側微高地縁辺部の地形方向に沿って作られており、これより東側一円に展開しているものと推定することができる。

古墳時代前期には、微低地部分に氾濫の際の流路がみられ、水田を営む事ができない一時期があったことを推定することができる（第20図下）。

その後の変遷は明確ではないが、少なくとも鎌倉時代頃には土地は安定し、調査地を含む周辺地は水田地帯として機能していたものと考えられる。なお調査地周辺は、現在においては亀川条里^{（註2）}と呼ばれる条里制土地区画の景観を良好に残しながら農耕地として利用されている。



第20図 遺構変遷模式図

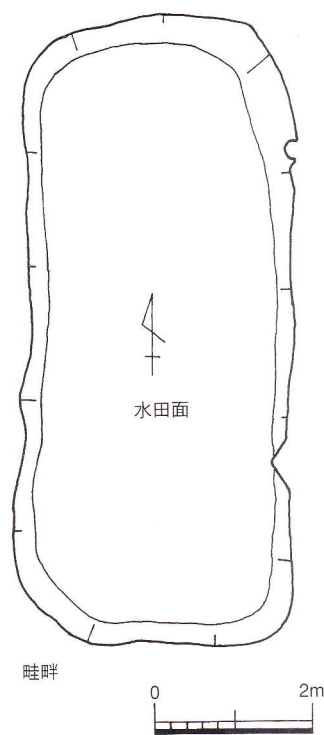
(2) 特徴的な出土遺物について

今回の調査において弥生時代中期後葉（紀伊第Ⅳ様式の時期）の出土遺物に特徴的なものがみられた。

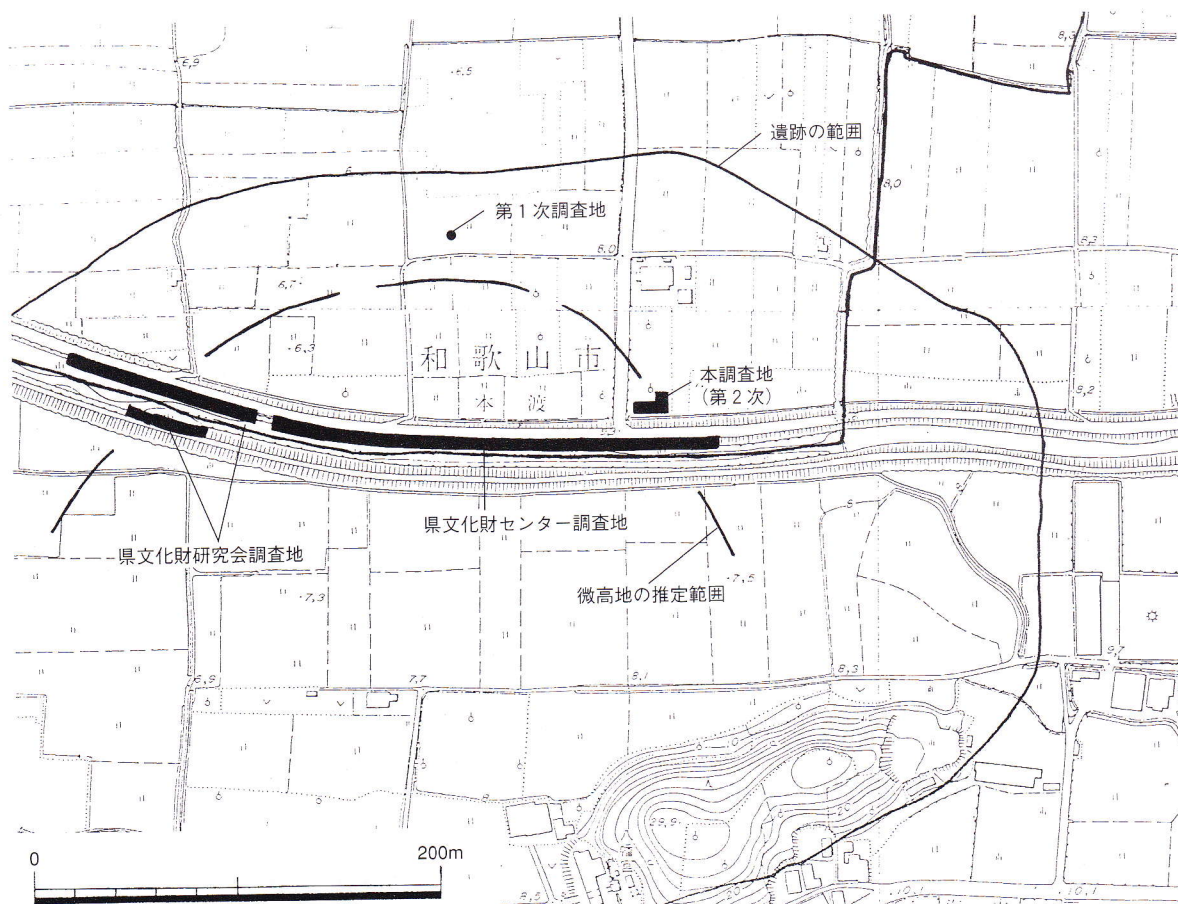
まず、赤色顔料を塗布した壺（巻頭図版1、第16図、写真2）であるが、器種は細頸壺と考えられ、体部上半の頸部から肩部にかけての小破片2点である。類例をみないものであるが、瀬戸内沿岸地域からの搬入品である可能性を考えることができる（註3）。また、ミニチュア土器や土製品に鳥形の可能性のあるものもみられ、調査地北側隣接地の和歌山県文化財センター調査地で出土した銅鐸形土製品や鳥形土製品などを加えて、これらの遺物を祭祀遺物の一群と評価することができ、調査地は弥生時代中期後葉（紀伊第Ⅳ様式の時期）の祭祀空間の一角であった可能性を指摘することができる。

また、多孔土器（第17図、図版21）の出土について、多孔土器は濾過器との見方もあり（註4）、和歌山県内では初の出土品であると考えられる（註5）。

台形土器（第17図、図版22）については5個体分確認するこ



第21図 太田・黒田遺跡第26次調査検出の小区画水田



第22図 弥生時代の微高地推定範囲

とができたが、和歌山県内では太田・黒田遺跡^(註6)と岡村遺跡^(註7)の2遺跡に限り出土例がみられるものである。この遺物は報告例から^(註8)通常1遺跡に数例みられる程度のものであり、当遺跡出土例は調査面積から考えて1遺跡単位では多量の出土であるといえる。

(3) 岡村遺跡北部の微高地範囲の推定

調査の結果、弥生時代を通じて本調査地の西側に微高地が展開しているものと考えられたが、この微高地の西限は当調査地から亀の川下流約250m地点で検出されており^(註9)、また当調査地から北西約200m地点の調査^(註10)では微高地が検出されていないことから岡村遺跡の弥生時代集落が立地したとみられる微高地の北側部分の範囲を推定することができる(第22図)。この微高地推定範囲は海南市教育委員会が実施した範囲確認調査^(註11)のボーリング調査での包含層分布範囲推定線とおおむね一致するものとみられる。

本調査地の東側では微高地縁辺部に河道(SD-1)(第20図上)を検出したが、この旧河道は1988年の河川改修工事に伴う調査で検出されたSD-51^(註12)の延長部分に相当するものとみられ、これは遺跡東部にある宮山東方に推定されていた自然流路の一部と考えられているものである。さらに、この旧河道は本調査地から北西部に推定されている東西方向の旧流路に接続するものと思われる。

以上、今回の調査で岡村遺跡の微高地北東限を検出し微高地(弥生時代集落)の北部地域の範囲を推定することができたことや弥生時代後期の水田を検出し初めて岡村遺跡の生産域についての資料を得たこと、赤色顔料を塗布した壺などの祭祀遺物の出土から本調査地が祭祀空間の一角であった可能性を指摘したことなど岡村遺跡の性格の一端を明らかにすることができた。

【註記】

(註1)『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1995年

(註2)『紀伊国の条里制』中野榮治 古今書院 1989年

(註3)奈良県田原本町教育委員会藤田三郎氏の御教示による。

(註4)『田原本の遺跡2 唐古・鍵遺跡 Vol.2—土器編—』田原本町教育委員会 1998年

(註5)和歌山県文化財センター土井孝之・和歌山市教育委員会前田敬彦両氏の御教示による。

(註6)和歌山市立博物館大野左千夫氏の御教示による。

(註7)『岡村遺跡—亀の川中小河川改修工事に伴う弥生遺跡発掘調査概報—』(財)和歌山県文化財センター 1988年

(註8)『朝日ヶ丘遺跡 会下山遺跡—1973年—』芦屋市教育委員会 1974年

『八代深田遺跡』姫路市教育委員会 1977年

(註9)『岡村遺跡—亀の川改修工事に伴う弥生遺跡発掘調査概報—』(財)和歌山県文化財研究会 1983年

(註10)『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報3』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1996年

(註11)『岡村遺跡確認調査概報』海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会 1980年

(註12)註7文献に同じ

報 告 書 抄 録

ふりがな	わかやましないいせきはつくつちようさがいほう							
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報							
副書名	平成9年度							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	北野隆亮・奥村薫・高橋方紀・藤薮勝則							
編集機関	和歌山市教育委員会・財団法人 和歌山市文化体育振興事業団							
所在地	☎640-8156 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 0734-32-0001 ☎640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL 0734-35-1195							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
にしきれいせき 西吉礼遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 きれ 吉礼	3020150	299	34° 12' 04"	135° 14' 14"	19971118 19971125	25	個人 住宅 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西吉礼遺跡	散布地	弥生時代 古墳時代	大溝(旧河道)	弥生土器・須恵器 土師器・石器		古墳時代の 河道を検出。		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
おかむら いせき 岡村遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 もとわたり 本渡	3020150	395	34° 10' 17"	135° 13' 43"	19980216 19980310	132	盛土 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岡村遺跡	散布地	弥生時代	水田、土坑、溝	弥生土器、石器 赤色顔料を塗布した壺 多孔土器、台形土器		中期の河道 後期の水田		

図 版

西吉礼遺跡	1 ~ 6
岡村遺跡	7 ~ 24



調査前の状況（南から）



全景（南から）



全景（北から）



SD-1, SD-3 土層堆積状況（西から）



SD-2 土層堆積状況（北東から）



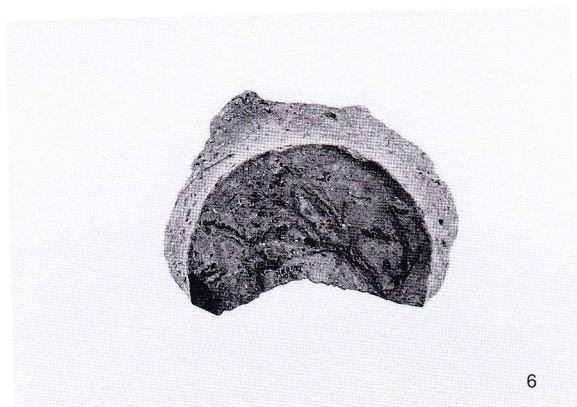
調査区土層堆積状況（西から）



第5層出土土器 2 弥生土器 壺



第5層出土土器 4 弥生土器 甕



第5層出土土器 6 弥生土器 底部



第5層出土土器 10 弥生土器 高杯



第5層出土土器 11 弥生土器 壺



第5層出土土器 13 弥生土器 壺



第5層出土土器 14 弥生土器 壺



第5層出土土器 17 弥生土器 甕



22

SD-1 出土土器 22 須恵器 杯蓋



23

SD-1 出土土器 23 須恵器 杯蓋



25

SD-1 出土土器 25 須恵器 台付鉢



27

SD-1 出土土器 27 須恵器 平瓶



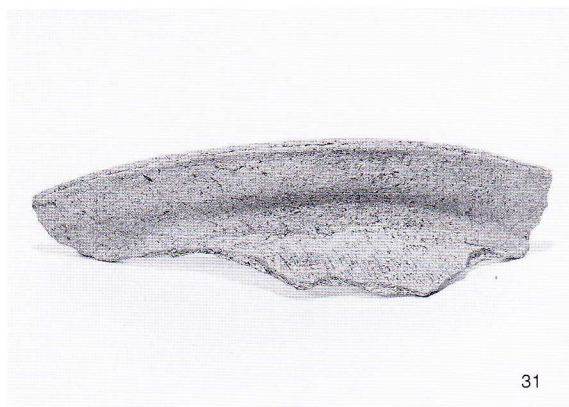
28

SD-1 出土土器 28 須恵器 甕



29

SD-1 出土土器 29 須恵器 甕



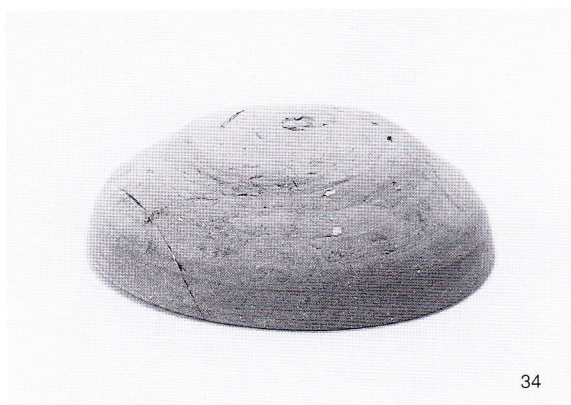
31

SD-1 出土土器 31 須恵器 甕



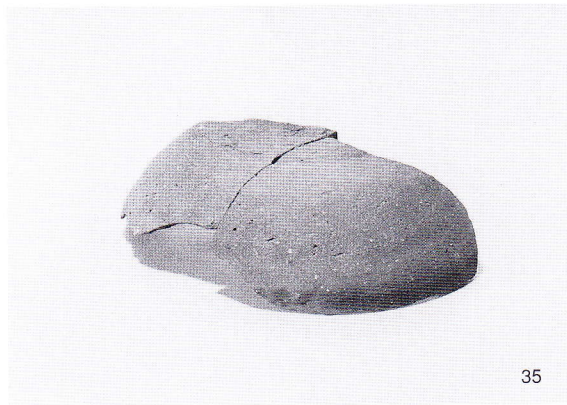
32

SD-1 出土土器 32 須恵器 高杯



34

第5層出土土器 34 須恵器 杯蓋



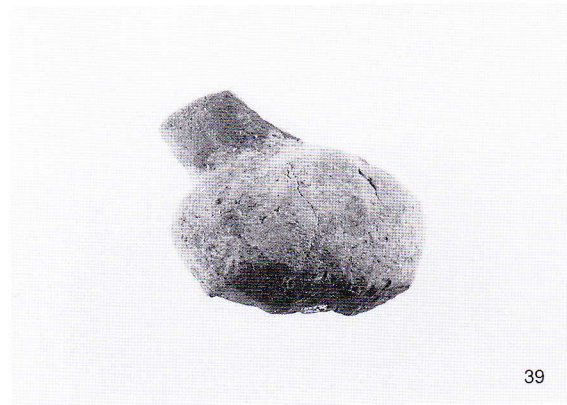
35

第5層出土土器 35 須恵器 杯蓋



37

第3層出土土器 37 須恵器 甕



39

第5層出土土器 39 土師器 小型丸底壺



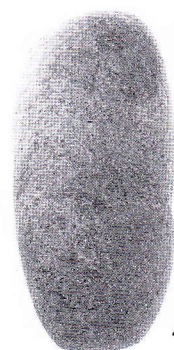
40



42



44



41



43



45



46

40 石鏃、41～44 叩石、45・46 磨石



調査前の状況（東から）



第1区 東壁面土層堆積状況（西から）



第1区 全景 (西から)



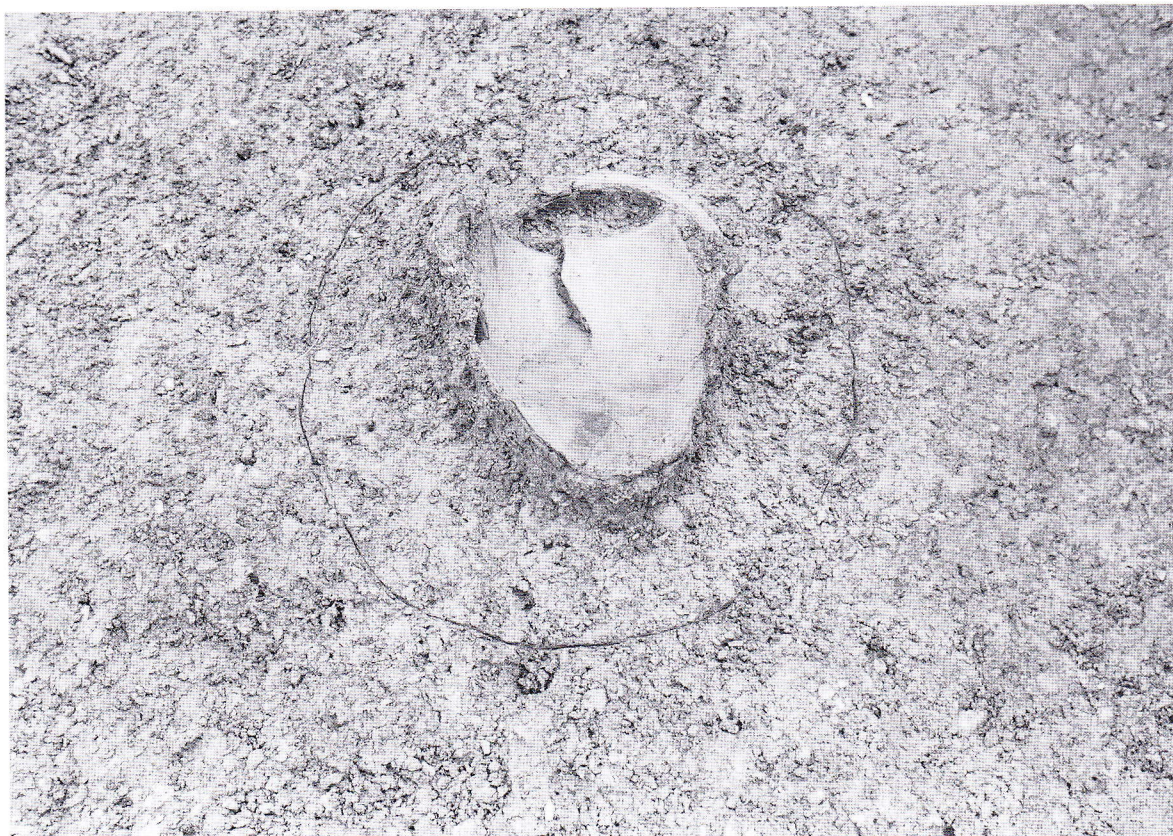
第1区 全景 (東から)



第1区 SD-2 土層堆積状況（北から）



第1区 SK-1（南から）



第1区 SK-3 遺物出土状況（北から）



第1区 SK-3（北から）



第2区 SD-1 第1層 上面検出状況（西から）



第2区 SD-1 第1層 上面検出状況（南から）



第2区 水田遺構検出状況（東から）



第2区 水田畦畔（南から）



第2区 SD-1 (西から)



第2区 SD-1 (南から)



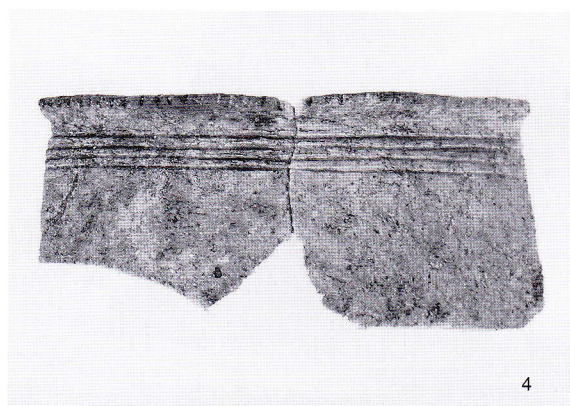
第2区 SD-1 第3層下位自然木出土状況（西から）



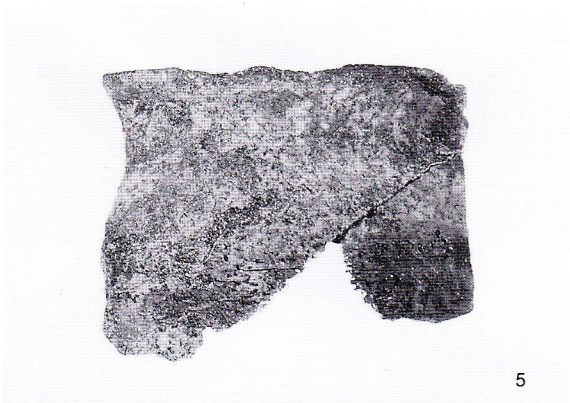
第2区 SD-1 第3層下位遺物出土状況（東から）



2 弥生土器 壺



4 弥生土器 甕



5 弥生土器 甕



7 弥生土器 壺



SK-出土土器 8 弥生土器 壺



SK-3 出土土器 9 弥生土器 甕

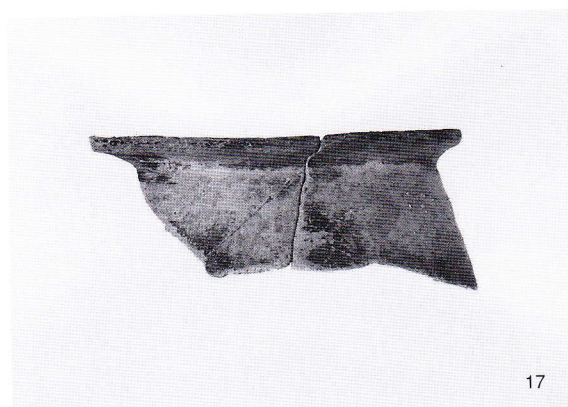


SK-1 出土土器 11 弥生土器 壺



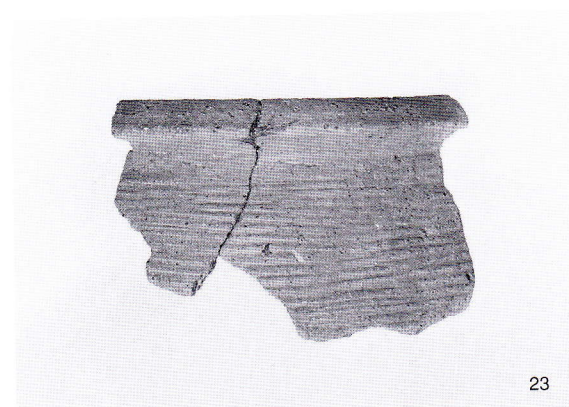
16

SX-3 出土土器 16 弥生土器 壺



17

SX-3 出土土器 17 弥生土器 甕



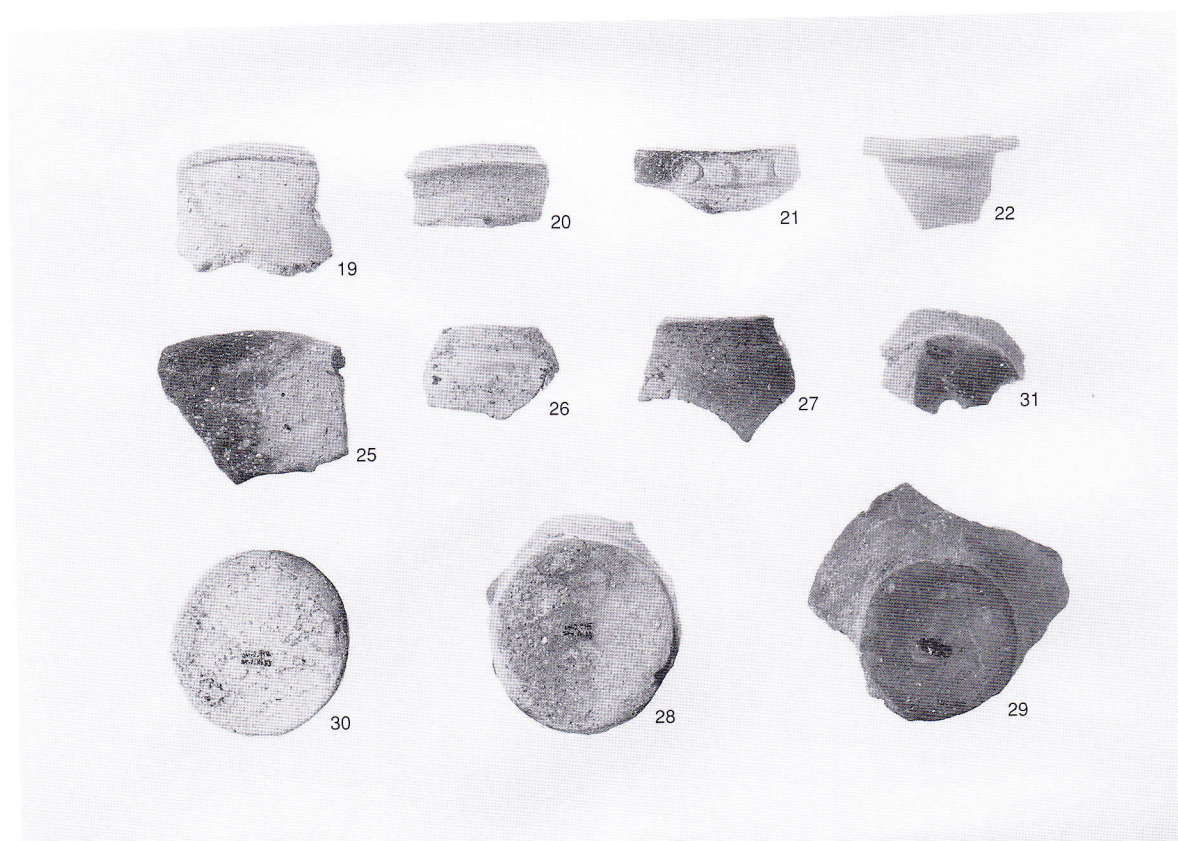
23

SX-1 出土土器 23 弥生土器 甕

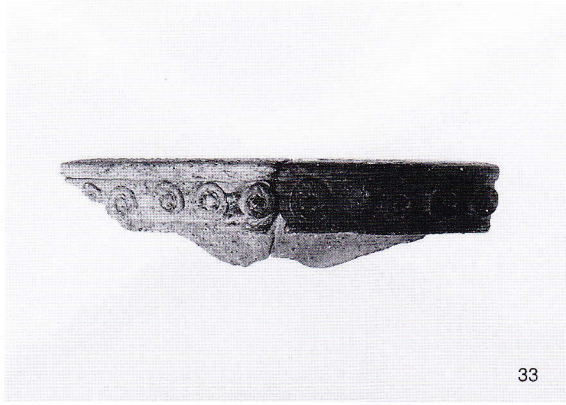


24

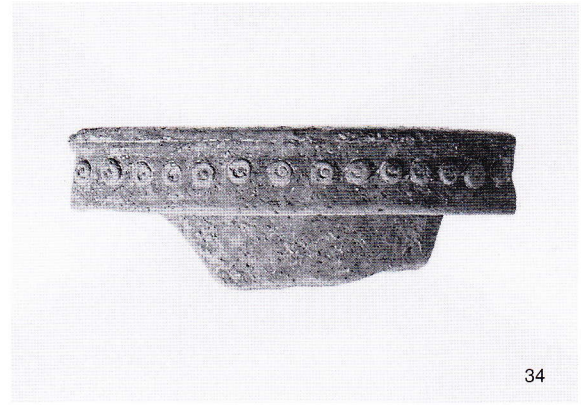
SX-1 出土土器 24 弥生土器 脚部



SX-1 出土土器 19～21 弥生土器 壺、22 弥生土器 甕、25・26 弥生土器 高杯、27 弥生土器 鉢、28～30 弥生土器 底部、31 弥生土器 甑



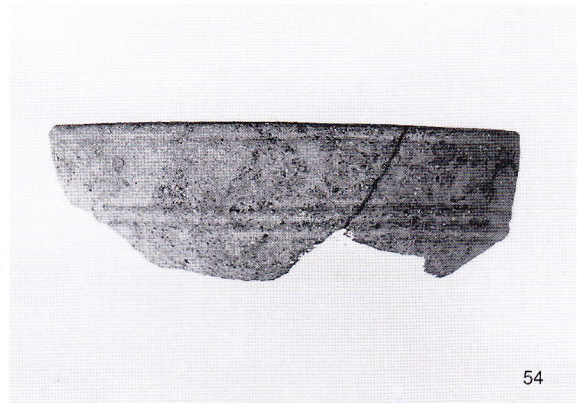
SD-2 出土土器 33 弥生土器 壺



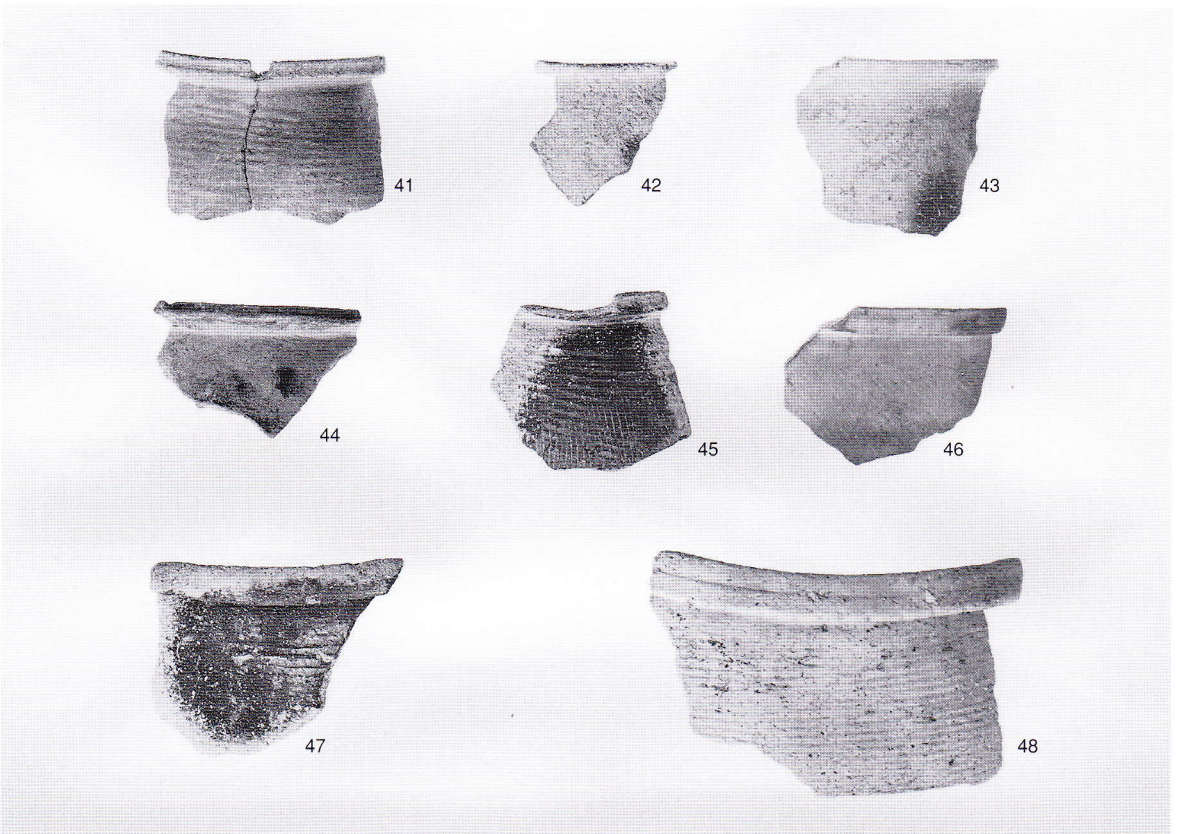
SD-2 出土土器 34 弥生土器 壺



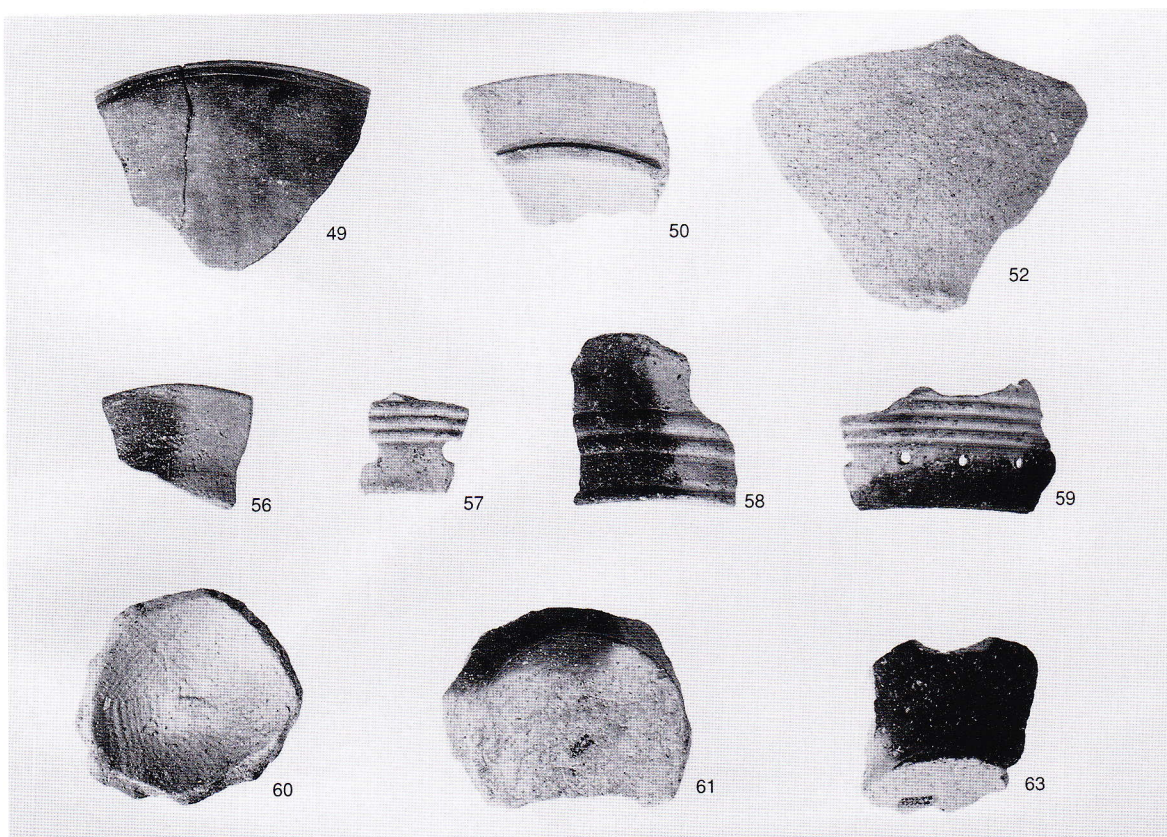
SD-2 出土土器 36 弥生土器 壺



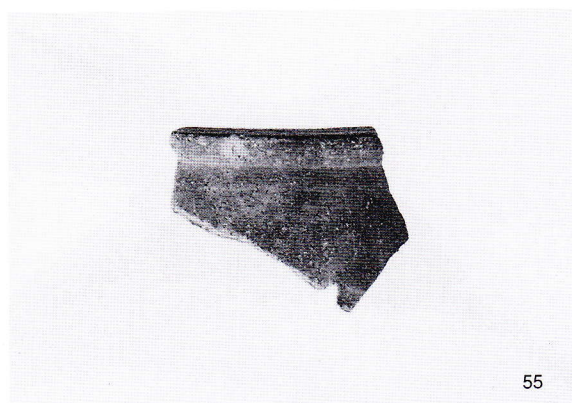
SD-2 出土土器 54 弥生土器 鉢



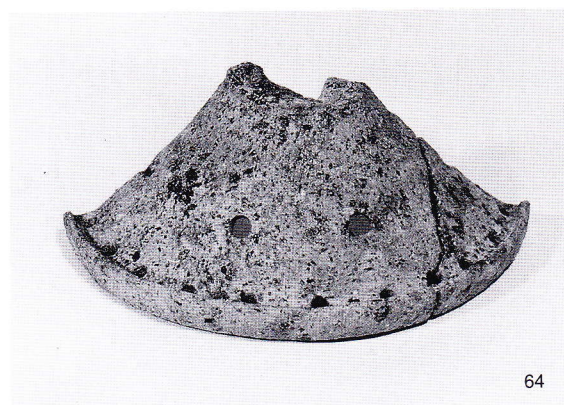
SD-2 出土土器 41~48 弥生土器 甕



SD-2 出土土器 49・50・52 弥生土器 高杯、56 弥生土器 蓋、57～59 弥生土器 脚部
60・61・63 弥生土器 底部



SD-2 出土土器 55 弥生土器 鉢



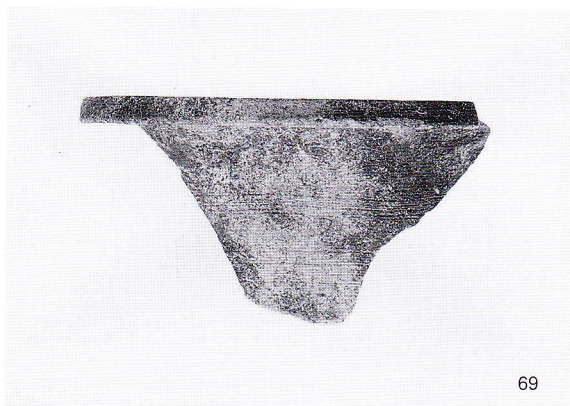
SD-2 出土土器 64 弥生土器 脚部



SD-2 出土土器 66 弥生土器 脚部



SD-2 出土土器 67 弥生土器 脚部



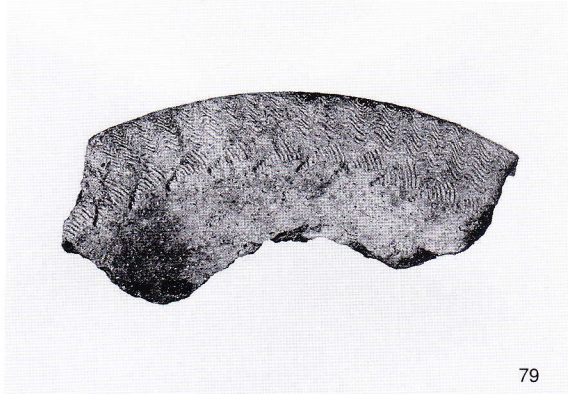
69 弥生土器 壺



71 弥生土器 壺



72 弥生土器 壺



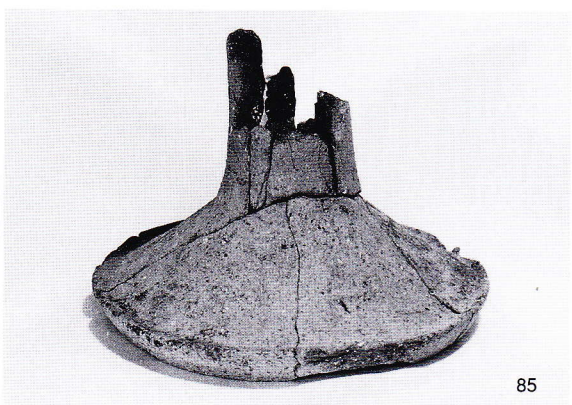
79 弥生土器 壺



80 弥生土器 壺



83 弥生土器 鉢



85 弥生土器 脚部



86 弥生土器 甕



87 弥生土器 底部



88 弥生土器 脚部



89 土師器 小型丸底壺



91 土師器 甕



92 土師器 高杯



94 土師器 高杯



95 土師器 高杯



96 土師器 高杯



98 多孔土器 99～101 ミニチュア土器

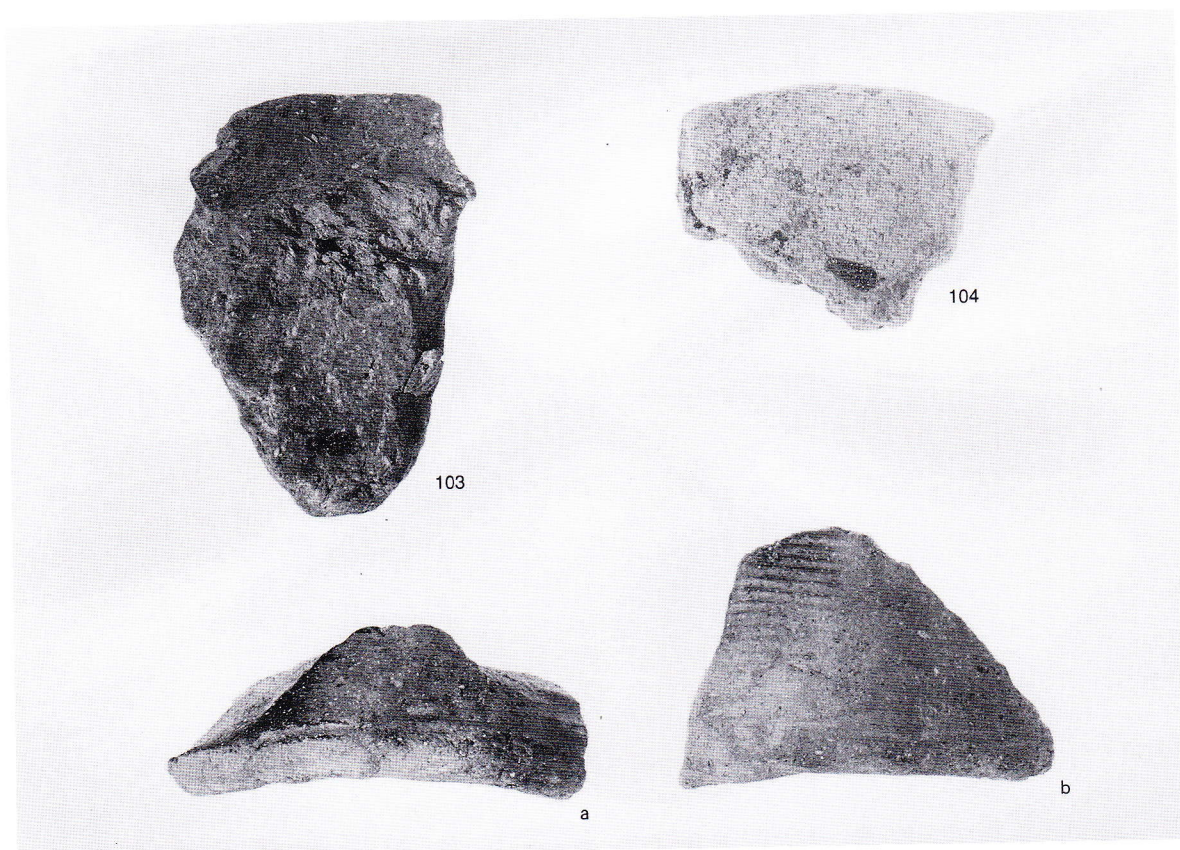


105・106 不明土製品、107・108 土玉

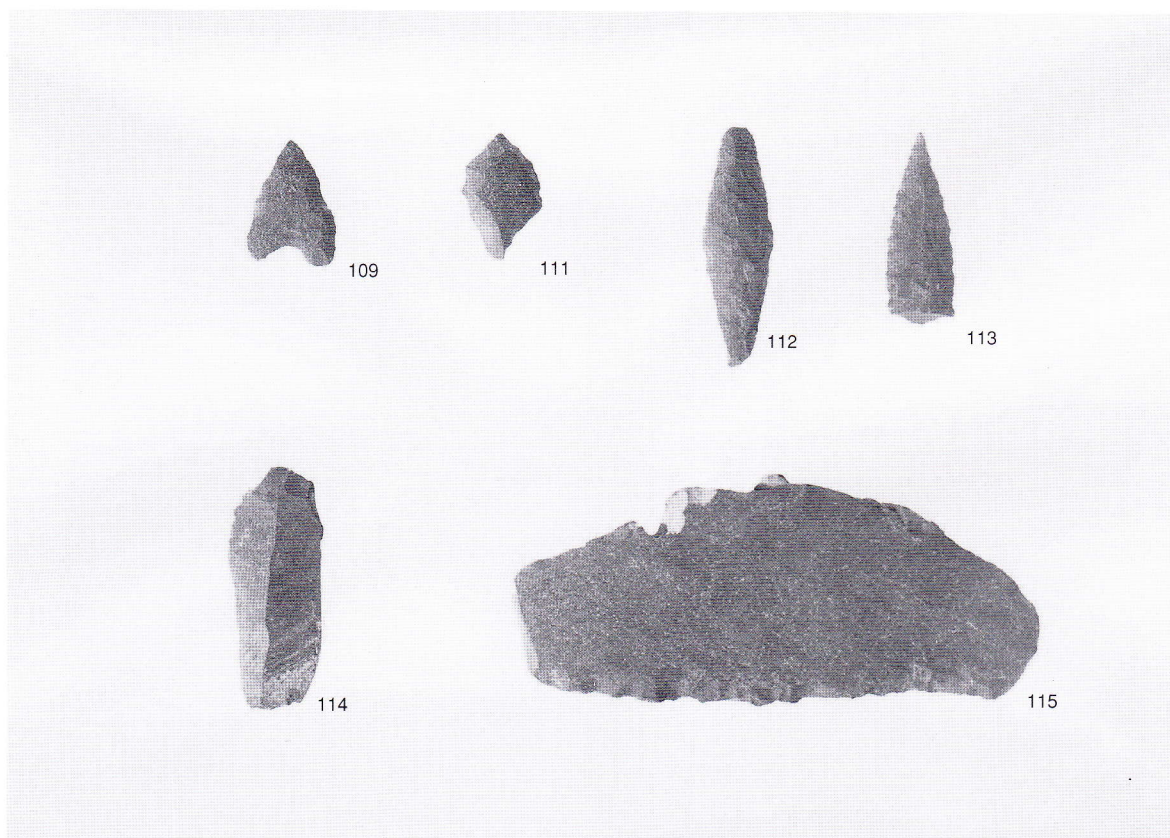


102

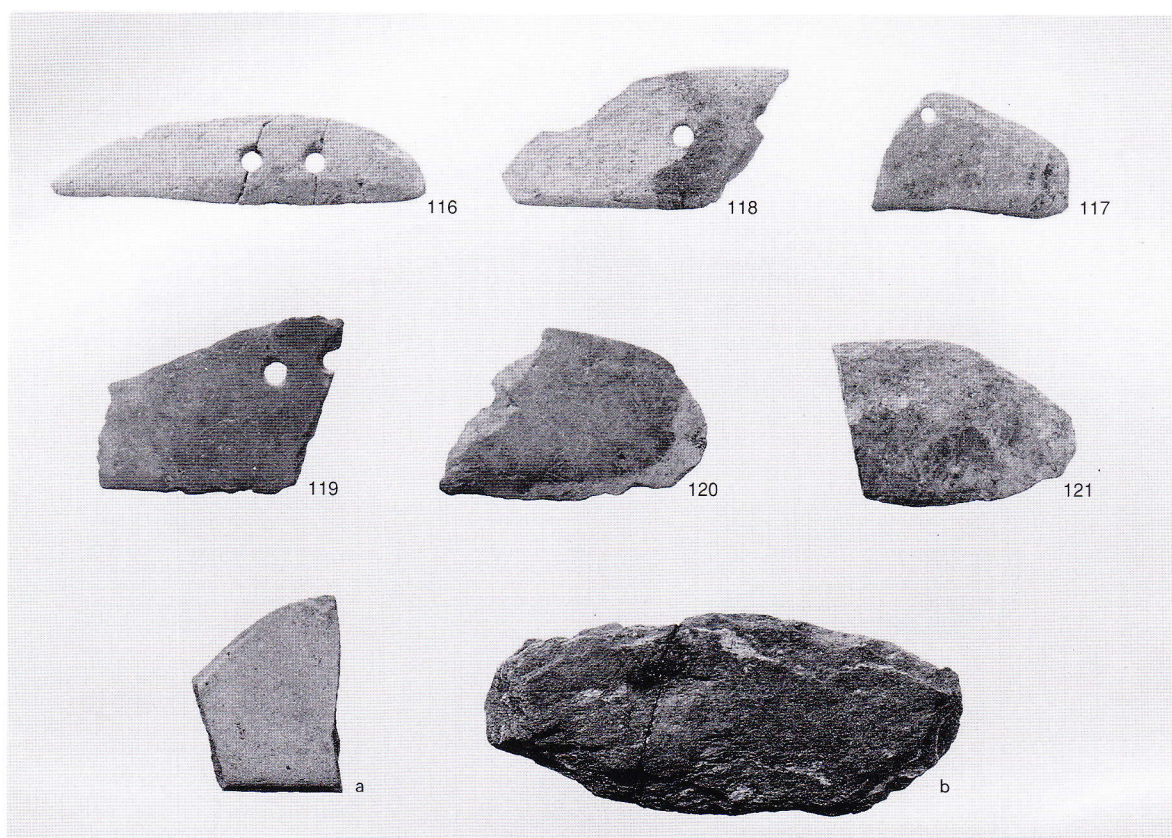
102 台形土器



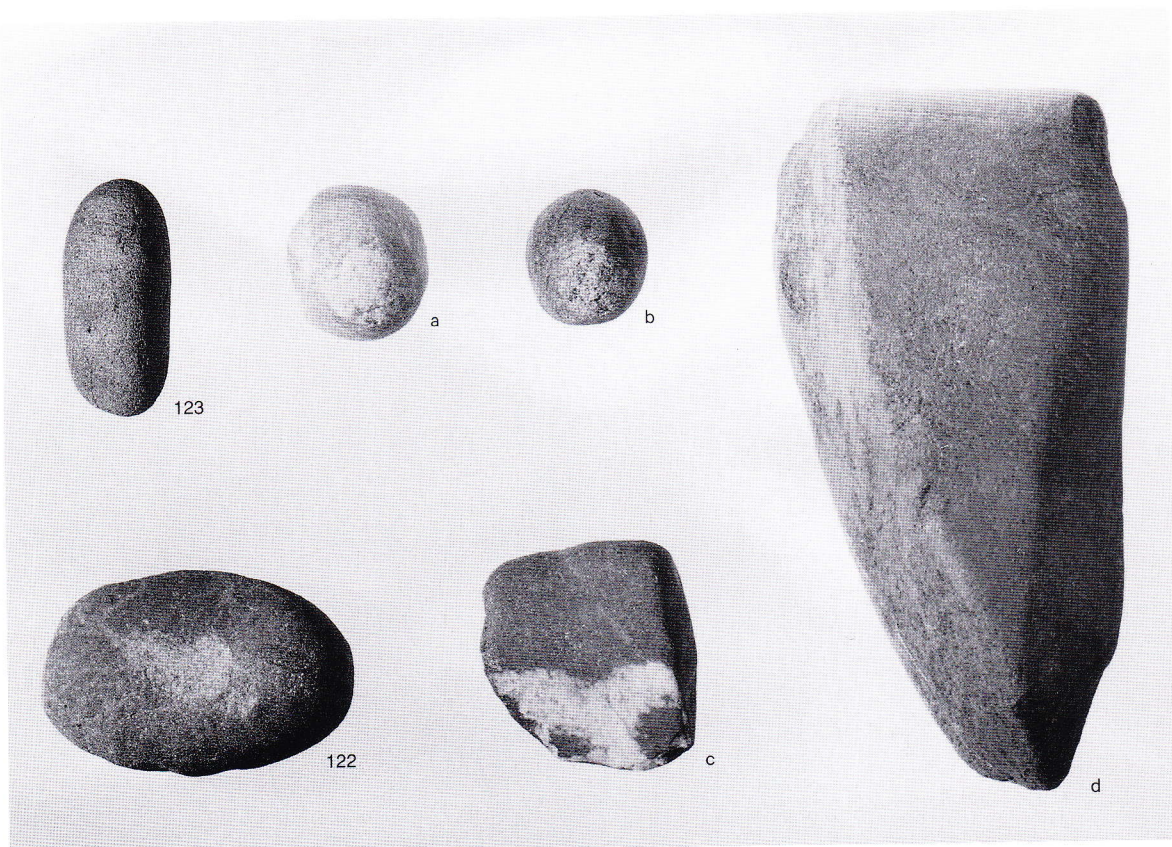
103 · 104 · a · b 台形土器



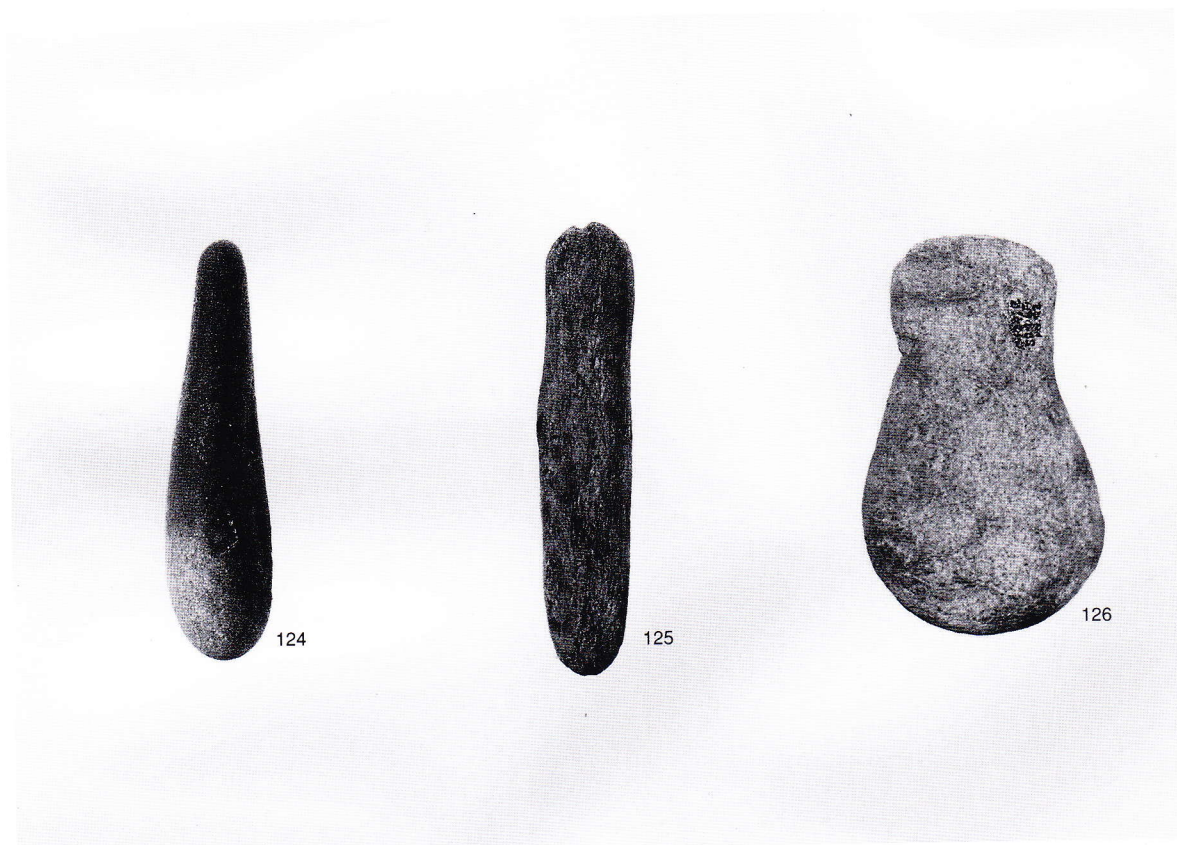
109・111・112・113石鏃、114・115スクレイパー



116～120石包丁、121・a・b石包丁未製品



122・123・a・b叩石、c・d砥石



124 磨石、125 棒状石製品、126 舌状石製品

平成11年3月31日発行

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成9年度 —

編集 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29

発行 和歌山市教育委員会

和歌山市七番丁23

印刷 株式会社 高木プリント

© 和歌山市教育委員会 1999